

食を通した子育て支援の観点を活かした保育所保育に関する研究 ～父親に焦点を当てた保育所が発信する食育プログラムの開発をめざして～

研究代表者	酒井 治子（東京家政学院大学 准教授）
共同研究者	會退 友美（東京家政学院大学 助教）
	岡林 一枝（（公財）児童育成協会）
	倉田 新（東京都市大学 准教授）
	汐見 稔幸（白梅学園大学 学長）
	林 薫（白梅学園大学 准教授）
	久保 麻季（東京家政学院大学大学院 人間生活学研究科）

研究の概要

本研究では「父親」に焦点を当てたプログラムのために、保育所の父親・母親の特性をもった「子どもの食を支える力」測定の質問紙票を提案するために、保護者にどのような力（知識・スキル・行動・食事観など）が必要か、また、その支援方法を検討した。

1) 保護者のグループインタビューから、食と命とのつながりを教えたい、食文化を伝えたいという「継承の意欲」、食育で子どもと一緒に「共感したいという願い」、子どもの発達を見通し、子どものやりたいことを親が理解している等の「子ども理解」の重要性が抽出された。それに加え、母親は余裕を持つ、子どものやりたい気持ちを受けとめる等のセルフコントロール力の重要性も指摘された。父親の特徴として「食べるモデル」の役割と共に、「食事づくりに関わる姿を見せたい」という想いも大きな柱となる可能性が見いだせた。また、家庭での食育は保育園での食育とのつながりが大きく、園の給食や食事の援助方法、食事づくりの方法等を手本にしたいと捉える力の重要性も明らかになった。支援方法として、「安心でき、評価の高い給食がある」「食物とつながった園舎・園庭がある」「農家の方等、地域と食によるつながり」があり、「保育園には子どもが経験的に学んでいける環境が整っている」という高い評価と信頼が抽出された。保護者の学習会以上に、豊かな食の体験活動と保護者の保育参加やその伝達である。保育内容が充実していることが子どもの語りを通して実感できることが重視されていた。

2) 専門職85人の自由回答質問紙調査から、父親に対しては、子どもと接する機会を増やし、食事場面で子どものお手本になること、母親に対しては、食への知識・理解を深め、食事作りを含めた実践が必要だと考えていた。その支援としては、父へは保育参加や食育活動への参加など食を通した親子の交流の場の提供が重視され、母へは給食試食会やレシピの配布など、家庭での食事作りに繋がるような支援が重視されていた。

3) 保護者が食に関する主体的な活動を実施するA保育所の専門職7人のグループインタビューから、母親では、保育所からの発信を受け止めるだけでなく、母親を通して家庭での子どもの様子を発信する力が必要であると認識していた。一方、父親では食事場面で子どもの様子や食事のスキルに関わる力が必要であると考えており、母親と同じように調理をすることなどを望むのではなく、イベント的な楽しみとしての位置づけで良いと考えていることも抽出できた。父親を対象とした食育プログラムには、調理のスキル向上に力点を置くのではなく、子どもの食に関する気づきの視点が保育士と共に活動する中で培われ、育まれていくことを望んでいた。保護者の主体性をもった食育活動に対する保育者の支援方法として、保護者のアイディアなどを快く受け止められる力と同時に、保育者が保護者と同じように活動に参加することが必要であると考え、実践していることがわかった。同時に、保護者が保育士に対して食に関する相談が多い年齢として、摂食形態が変化する0～2歳児であることが今回の調査から抽出できた。

以上のように、保護者から、また、専門職が双方からみた父親・母親の特性をもった「子どもの食を支える力」また、食を通した保護者支援方法が明らかになった。専門職は保護者が保育所から教えてもらう、情報をもらうだけでなく、考えて自ら行動する、つまり、養育力を高めていくスキルが重要だと認識していることも明らかになった。保護者の主体的な企画・運営を促すためには、保護者からの主観的ニーズ、想いや実際にされている工夫を引き出すこと、そのためのアセスメント票の開発が重要であることが解明された。

キーワード：保育所、父親、食育、子育て支援

1. はじめに

少子高齢化社会の進行に伴い、さまざまな少子化対策が講じられている。乳幼児期の保育・教育、地域の子ども・子育て支援を総合的に進める新しい仕組みとして、平成24年8月にいわゆる「子ども・子育て関連3法」が成立し、これらの法律に基づき、平成27年4月から「子ども・子育て支援新制度」が施行された。保育所や認定こども園は、子どもの保育とともに、保護者に対する子育て支援の重要な拠点とされる。

日本の家庭においては“子育てに父親不在”といわれる¹⁾ほど、子育てや家事に父親が関与しない状態が続いてきたといわれる。その一方で、近年、“イクメン”という言葉に表現されるように、政府や世論は父親の育児を推奨する流れにあるようにみえる。家庭での育児の実態をみると、ベネッセ教育総合研究所が2005年から継続的に行っている「乳幼児の父親に関する調査²⁾」では、「家事・育児に関わりたい」と思う父親が増加しているものの、その実態にはあまり変化がない事が報告されている。その理由として、父親の帰宅時間が遅いこと、子どもとの関わり方に自信が持てない事が指摘されており、女性も男性も仕事と家庭を両立できるようなワーク・ライフ・バランスを進めていくことができていない現状にある。

平成27年度保育科学研究の酒井らの調査³⁾でも、両親がそろった家族の場合、父親は子育てへのかかわりは少ないものの、子育てを楽しめるものとして捉え、母親以上に子どもへの接し方・関わり方に自信があることが明らかになった。両親家族で父親が関わっている内容として上位にあげられたのは「子どもを褒める」「お風呂に入れる」「子どもと室内で遊ぶ」「子どもを叱る」「子どもと室外で遊ぶ」「保育所の行事に参加する」の順で父親の8割が関わっていたが、「病気の時に面倒をみる」「保育園への送り迎えをする」「子どもを寝かしつける」「掃除をする」「食事を食べさせる」は6割以下に留まった。こうした傾向は及川ら⁴⁾、ベネッセ教育総合研究所等の調査^{2,5,7)}での傾向と同様であった。実施の食行動への積極性と共に、子どもの食発達、食事援助の方法、食事構成への理解や、食事づくり行動に対する自信も、母親に比べ、かなり低いことが分かった。

乳幼児期の食事の管理の大半は母親が担っており、母親の生活習慣や食態度が乳幼児の食生活に大きく影響するといわれる^{8,9)}。しかし、家庭での食環境は母親だけでなく、父親にも関係する可能性も拭い去れない。父親の食意識・食行動は母親の食意識・食行動と共通性や関連性がみられるとの報告もある¹⁰⁾。このことから、母親だけでなく、父親が作り出す食環境も子どもにとって大きいことが想定できる。そのため、幼児期における心身の発育・発達や基本的な生活習慣の形成などの特徴を踏まえ、適切な栄養摂取や食生活の支援を明示し、母親、

父親の双方の特性に目を向けた支援の充実を図る必要がある。

平成27年度乳幼児栄養調査¹¹⁾によると、約8割の保護者が子どもの食事について困りごとを抱えている。親の体験活動の不足、他者とのかかわりが希薄化しがちな環境の中では、食に関しても知識も不足し、スキルも向上しにくく、保護者にとって「食」は日常的に頻度が高く、そのかかわりの成果が「子どもが食べない」という形で表出することは子育てへの自信をなくすことにつながっているものと考えられる。

これまで、地域で展開される子育て支援プログラムの多くは母親が対象とされてきた。青野¹²⁾はこうした傾向は母親育児を再生産することになりかねないため、男性の子育て支援を進めるための施策やプログラムも必要であると述べる。国の施策としても、男性の育児参加を推進するため、育児中の父親向けサークルの育成や啓発講座の開催を支援する「子育てパパ応援事業」が2007年から展開されてきている。しかし、父親の子育て支援事業に関する研究報告は少ない。金山^{13,14)}や鈴木¹⁵⁾が子育て支援センターを利用する父親について調査報告によれば、父親は休日で利用が多く、父親が参加しやすい、父親専用のプログラムがあると、遊びや子育てに関する情報を得ることができたり、他の父親との交流ができたりすることが指摘されている。保育現場でも「おやじの会」などと称される保護者の会で父親が企画の中心となった活動が実施されているが、その成果についての科学的根拠をもった研究報告は多くない。

実施の保育所での保護者に対する支援を考えると、保育所保育指針¹⁶⁾が示すように、保育所が持つ人的資源、物的資源とともに、地域資源も有効に活用すべきであること、また、入所している園児の保護者のみならず、地域の子育て家庭、すなわち、地域全体を視野に入れることが重要である。そうした観点から考えると、「保育所が拠点となった食を通した子育て支援」は、当然、保育所の自園調理形式での食事提供の長所を活用したものであること、保育士とともに、栄養士や調理員等の人的資源も有効なものとして活用し、園としての養護の観点、教育の観点をまさに一体化して総合的に実施することが期待される。さらに、そうした活動を家庭の中に還流させることにより、子ども自身の育ちを支えるだけでなく、同時に保護者が意欲を持って生き生きと子育てし続ける力、そして生き生きと生活していく力を育むことを目指したい。その成果として、父親自身も食により関心を持ち、家庭全体を、さらに、地域をリードしていくことが期待される場所である。中村¹⁷⁾は子育てサークルに参加している父親のグループインタビューから、子育てを通して、子どもの成長への喜びや期待、新しい自分の発見などにより、「自分自身が楽しむ子育て」という思いに変化していくことを明らかにしている。こうした観点から考えると、子育てを通して、子どもが「食を営む

力」を培うことができる環境づくりを親がすることで、親自身の「子どもの食を支える力」が育成されることのみならず、「親自らが食を営む力」「食を楽しむ力」を生成していくことにつながることを期待できる。逆に言えば、親自身が「食を営む力」を育むためには、「子どもの食を営む力」とは何か、その方策を探索することが不可欠だといえるのではないだろうか。

子育て支援をめぐる投稿論文の動向に目を向けると、諏訪¹⁸⁾は子育て支援の場として、保育所以上に、幼稚園での母親支援、地域子育て支援拠点での支援が中心とされ、「子育て支援」＝母親の子育て支援という構図、しかも基本的には専業主婦の子育て支援であり、生活課題をもつ保護者や父親の家事育児参加までの内容を研究視野に入れた研究論文は皆無であることを指摘する。実際に、何を目標にして実施し、どのような評価の観点から評価されるべきであるのか、その構造の体系化を図る必要がある。

こうした背景の中で、酒井¹⁹⁾は、親子双方にとっての豊かな「食」をめざし、食を通したふれあい、分かちあい、学びあい、支えあいの観点から、保育所が拠点となった食を通した子育て支援に注目してきている。父親が自信を持って主体的に育児に参加できる実現可能なプログラムの提供が近々の課題と考えられる。昨年度の調査¹⁰⁾では、保育園児の保護者、特に父親に焦点をあてつつ、子育て支援の観点から、家庭での子どもの食育への関わりを支える食育プログラムの開発に向けて、0～2歳児は子どもの食行動の発達が著しい時期、3～5歳の体験の幅が広がる時期、それぞれの時期にあわせた保育所での食を通した保護者プログラムの内容へのニーズを解明してきた。しかしながら、保護者が活動の成果として何を求めているのか、つまり目標や評価の観点は何かを明らかにしなくては、「父親・母親」の特性に焦点を当てたプログラムの開発に不可欠である。

そこで、本研究の目的は、「父親」に焦点を当てたプログラムの開発に向けて、保育所の父親・母親の特性を生かした「子どもの食を支える力」測定の質問紙票の開発を進め、評価指標の提案するための基礎資料として、研究1) 保護者のグループインタビューから、「保護者の子どもの食を支える力(知識・スキル・行動・食事観など)」とは何か、また、保育所に対してどのような食育のニーズをもっているのかを解明し、研究2) 保育所職員が子どもの食の育ちを支えるために、保護者にどのような力(知識・スキル・行動・食事観など)が必要だと考えているのか、研究3) 保育所で、親を対象とした食育活動をどのような手順で進めているかを明らかにするヒアリング調査を実施した。

本研究では、研究1・3において、子どもの保護者、また、専門職である保育士、双方から、父親・母親に必要な「子どもの食を支える力とその支援方法」についての「なまの声」からニーズを把握することで必要な条件

を明らかにするために、グループインタビューの手法を用いた。この手法は、グループダイナミクスを活用して幅広い情報を得ることができるとともに、相互作用による意見を引き出すことができ、参加者のプレッシャーが少ないなどの効果がある²⁰⁾。

Ⅱ. 研究1) 保護者の子どもの食を支える力(知識・スキル・行動・食事観など)～保護者のグループインタビュー～

1. 目的

本研究の目的は、「父親」に焦点を当てたプログラムの開発に向けて、保育所の父親・母親の特性を生かした「子どもの食を支える力」測定の質問紙票の開発を進め、評価指標の提案するための基礎資料として、保育所の保護者のグループインタビューから、「保護者の子どもの食を支える力(知識・スキル・行動・食事観など)」とは何か、また、保育所に対してどのような食育のニーズをもっているのかを解明することを目的とした。

2. 方法

1) 対象

東京都2園、神奈川県2園の計4園の保育園に通う保護者を対象にグループインタビューを実施した。参加者の募集は、研究目的等を記載したお便りを配布し、夫婦ともに参加か、父親のみか母親のみかを記入してもらい、用紙を切り取って提出する方法とした。参加者数は、4園で父親12人、母親21人の合計33人であった。対象者の年齢は、20代～50代である。また、対象者の仕事はフルタイムが23人、パートタイムが6人、育児(介護)休業中は4人であった。

2) 調査方法

各園の参加人数は、A園では6人(父親3人、母親3人)、B園では11人(父親4人、母親7人)、C園では7人(父親2人、母親5人)、D園では9人(父親3人、母親6人)であった。このため、B園では父親と母親で別にグループインタビューを行い、その他の園は父親と母親の合同で実施した。日時は、土曜日もしくは日曜日の10時～11時半の1時間半であり、実施場所は各園の教室で行った。落ち着いた雰囲気できるように、お茶とお菓子を用意した。インタビュー前には、研究倫理を説明し、同意を得たものには署名を得た。また、同意者と同時に質問紙で属性、仕事、子どもの年齢について回答してもらった。インタビューの内容は、ICレコーダーで録音した。インタビューの司会は、研究者1～2人が行った。司会者は、話しやすい環境づくりに配慮したり、参加者に話を振ったりと、できるだけメンバーの自発的な発言が多く引き出せるようにした。また、司会者に加えて2～3人の観察者が対象者の発言や表情などの記録を行った。

表1 対象者の特性

	対象者	性別	年齢	仕事	第一子の年齢	性別	第二子の年齢	性別	第三子の年齢	性別	第四子の年齢	性別
A 保育園	A*	女	30代	パートタイム	4歳5か月	男						
	B	女	40代	フルタイム	4歳11か月	女						
	C	男	40代	フルタイム	15歳1か月	男	9歳11か月	女	5歳3か月	男		
	D*	男	30代	フルタイム	4歳5か月	男						
	E	女	20代	パートタイム	1歳3か月	女						
	F	男	40代	フルタイム	5歳5か月	男	3歳5か月	女				
B 保育園	A*	女	30代	フルタイム	3歳10か月	男	1歳10か月	男				
	B	女	30代	パートタイム	5歳0か月	女	2歳0か月	男				
	C	女	30代	フルタイム	6歳1か月	女						
	D	女	30代	フルタイム	5歳1か月	男	2歳2か月	男				
	E****	女	30代	フルタイム	6歳4か月	女						
	F**	女	30代	育児（介護）休業中	6歳3か月	女	0歳7か月	男				
	G***	女	30代	フルタイム	5歳8か月	男	1歳7か月	女	1歳7か月	女		
	H**	男	30代	育児（介護）休業中	6歳3か月	女	0歳7か月	男				
	I****	男	50代	フルタイム	6歳4か月	女						
	G*	男	30代	フルタイム	3歳10か月	男	1歳10か月	男				
	K***	男	30代	フルタイム	5歳8か月	男	1歳8か月	女	1歳8か月	女		
C 保育園	A	女	30代	育児（介護）休業中	9歳4か月	男	5歳6か月	女	3歳3か月	男	0歳2か月	女
	B	女	30代	パートタイム	5歳	男						
	C	女	40代	フルタイム	4歳9か月	女						
	D*	女	40代	フルタイム	4歳11か月	男						
	E	女	30代	フルタイム	5歳10か月	男	3歳6か月	男	1歳2か月	女		
	F	男	40代	フルタイム	4歳6か月	女	2歳4か月	女				
	G*	男	40代	フルタイム	4歳10か月	男						
D 保育園	A*	男	40代	フルタイム	6歳1か月	男	3歳5か月	男				
	B*	女	30代	フルタイム	6歳1か月	男	3歳5か月	男				
	C**	男	40代	フルタイム	15歳7か月	男	5歳7か月	男				
	D**	女	30代	パートタイム	15歳7か月	男	5歳7か月	男				
	E***	男	40代	フルタイム	8歳7か月	女	6歳5か月	男				
	F***	女	30代	フルタイム	8歳7か月	女	6歳5か月	男				
	G	女	30代	フルタイム	6歳9か月	女	3歳2か月	女				
	H	女	30代	育児（介護）休業中	5歳4か月	男	0歳11か月	男				
	I	女	30代	パートタイム	12歳4か月	男	6歳3か月	女				

*の数が同一の対象者は夫婦

表2 対象園の特性

	運営開始	所在地	定員	基本保育時間
A 保育園	平成9年	東京都	100	7:00～18:00
B 保育園	平成22年	東京都	110	7:00～18:00
C 保育園	平成24年	神奈川県	110	7:00～18:00
D 保育園	平成28年	神奈川県	113	7:00～18:00

インタビューは事前に半構成的に作成したインタビューガイドに沿って進めた。インタビューの内容は、①家庭でどのような食育をしているか、②父親・母親自身が望む「子どもの食を支える力（態度・スキル・行動・食事観など）」、③保育園での食育や食に関する支援を知っているか、④保育園に家庭からどのような食育を望んでいるかであった。インタビュー後は、募集の際に周知していた謝礼を渡した。

3) 分析方法

インタビュー後、ICレコーダーから逐語録を作成し、KJ法により重要アイテムを抽出し、重要アイテムをま

とめてサブカテゴリーを作成した。重要アイテムの抽出は妥当性を確認するため、複数回にわたって逐語録を確認し、検討を重ねた。客観的に分析を行うために、一連の作業は管理栄養士の資格を持つ3人で行い、全員の意見が一致するまで検討を重ねた。

3. 結果及び考察

1) 家庭での食育

(1)母親の家庭での食育

食べる場面での親子のかかわりとして（表3）、「家族で一緒にご飯を食べる」があげられ、その食卓では「子

表3 母親回答 食べる場面での親子のかかわり

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	発言
食べる場面での親子のかかわり	家族で一緒にご飯を食べる	家族で一緒にご飯を食べる	朝ごはんは家族で一緒に食べている 夫は作らず一緒に食べる 家族みんなで食べる 朝と夜は家族で一緒にごはんを食べる 家族みんなで一緒にごはんを食べる 家で食べる日を決めている 夫は料理を作らないが一緒に食べる
		子どもたちだけで食べている	忙しくて子どもだけでごはんを食べさせてしまう 親が先に食べ終わって席を立てしまう
	子どもが保育園での活動を母親に伝える		梅ジュースの食べられるタイミングを子どもが教えてくれる 子どもが梅ジュースの作り方を親に教えてくれる イナゴを食べる作り方を親に話す 子どもが保育園で習ったお米の神様のことを夫に言う イナゴを食べるときの状況を親に話す 保育園と家では(野菜が)できることが違うと言う 子どもは家で作ったごはんを夫に食べさせるが、保育園の方がおいしいと言って鼻高々 子どもがスナップエンドウの美味しさを知っている 子どもがバッタとイナゴの違いについて親に話す 子どもが夫へお米を残してごちそうさまをはいけないと言う 給食について子どもが話す 子どもは保育園での楽しかったことを話してくれる 草の味(よもぎ)とか子どもは全然平気だと話してくれる
	夫が家族に食について話す	家族で行事について話す	家族で行事について話す
		子どもに食の食べる意味を教える	女の子には紙がつやつやになるよというご飯を食べたりする
		子どもに食のありがたさを教えると食べる	食のありがたさが分かると子どもは食べる 夫が野菜をもらってきたときに、子どもに大事に作っていたできたものだから残さないで食べようねみたいなありがたさをわかってもらうようにしている
		子どもに旬の野菜を教える	夫が仕事の関係で旬の野菜を持って帰ってきてくれるため、そこで旬の野菜を教える
		夫と食に関して話す	夫は(自分の父親が育児や家事をしなかった人だったから、それがあまりうれしくなくて、)自分は子どもと関わりたいと思っている 夫は(自分の父親が育児や家事をしなかった人だったから、それがあまりうれしくなくて、)家事もできることは探してやろうと思っている
	祖父母も一緒に食べる		祖父母とご飯を一緒に食べる 祖父母が子どもが作ったものを喜んで美味しいと言って食べる 誕生日などに自分の作った梅ジュースを祖父母に飲んでもらう 子どもが自分で育てた野菜(トマト)を祖父母に提供する

どもが保育園での活動を母親に伝える」が最も多く抽出され、次いで子どもに食の食べる意味や食のありがたさ、旬の野菜を教えるといった「父親が家族に食について話す」等が多く挙げられたが、一方で、母親自身が食卓でどのような会話をしているかについては抽出されなかった。食べる場面での母親の援助をみると（表4）、父親に比べ、子どもを褒めたり、声かけをして食べることを促す「食の援助」が多く抽出され、そのために、食べることに集中できるように、子どもの食環境を整えることを配慮していた。

一方、食事作り場面での親子のかかわりをみると（表5）、保育園での当番活動等の活動と連動して家庭での食事づくりが実施され、波及効果が高いことがわかる。実際に、「保育園の当番をやりたいと親に言う」という声も抽出できた。食事作り場面での親子のかかわり（表6）をみると、子どもと一緒に買い物に行く、野菜づく

り、食べたいメニューを聞く、食事づくり、調べて一緒に作る、包丁を使わせる、子どもに味見をさせると多岐にわたり、その効果として、子どもが調理に関わると食べる」と評価していることも明らかになった。さらに、子どもと一緒に図書館に行って調べたり、農家さんに来たりと、親子で食の学びが発展していく姿が抽出された。

母親の食事づくり行動としても（表7）、手作りをしている、だしをとる、食材のこだわり、料理の工夫、うす味にする工夫、野菜を出す工夫等、忙しい中で様々な工夫を凝らしている実態も明らかになった。

父親の食事づくり行動をみると（表8）、食事づくりに関わっている父親もみられたり、得意な分野は任せているといった声も抽出できた。食事を作ってくれた時には感想を言ったり、褒めたり、有難さを伝える等の配慮もみられた。

表4 母親回答 食べる場面での母親の援助

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	発言
食べる場面での母親の援助	母親の子どもへの食の援助	行動	嫌いなものでも一口は食べないのはダメという風になっている 野菜を食べないので食べさせる (本当は大皿にして子どもから食事をとってもらいたいのが)好きなものしかとらないので小分けにして、出したものは食べなさいというようにしている 食べなさいと強制的に食べさせた 朝ごはんを少しでも食べさせる
		ほめる	(子どもが食べないので、保育園と同様に)子どもを家でもほめている これ食べるとお肌きれいになるよって言って食べさせる
		声かけ	お願いだからちょっとだけでも食べてくれないかなと声をかけると一口ずつだが食べるようになった 残さないで食べようねと声をかける 親は子どもの気分を上げさせて食べさせようとしている 嫌いなものも食べなさいと言う
	父親の子どもへの食の援助	子ども自身に食べるように促す	自分で食べてねみたいな感じで一生懸命自分で食べさせる できるだけ子どもと同じものを食べる
			離乳食は夫が子どもに与えてくれる 休日は夫が子どもに食事を与える
	食べ方を教える	マナー 食事のあいさつをする 食事時の態度を注意する	家族でマナーについて話す 家族みんなで一緒にいただきますをする 子どもの食事時の態度を注意する(ひじ、お箸の持ち方)
	子どもの食環境を整える	食事ではテレビをつけない 家族でルールを作った テレビをつけて食べさせてしまっている 楽しい食卓を作っている	食事中はラジオにしている 朝ごはん中はテレビをつけないでラジオにしている テレビが見えないところでごはんを食べる 食事中テレビはつけない (食事中にテレビはつけない)ように食べやすい環境は大人がつくっている 食事の時テレビを見ない決まりを作った テレビをつけて食べさせてしまっている 子どもが楽しいと思えるような食卓を作る

表5 母親回答 食事づくり場面での親子のかかわり

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	発言
食事作り場面での親子のかかわり	保育園での活動と連動した家庭での食事づくり	食事づくり	家でグリーンピースとりをさせている (子どもが食べないので)保育園と同じメニューを作っている 保育園のグリーンピースとりに参加し、そのときにもらった食材をその日のごはんに取り入れる (給食で使う食材を子どもたちが食べる日は)家でも食事に取り入れている 給食で使う食材を家庭の食事にも取り入れる 保育園からもらったヘチマを家で植えた 保育園で楽しくやった寿司屋を、家でも子どもが寿司屋をやる 子どもが保育園から持ってきたよもぎで団子を作った 子どもと一緒に梅干づくりをしている 梅ジュースなどは園のものを基準に作っている 梅シロップづくり 子どもとぬか漬け作り 子どもと一緒に味噌作りをしている(2) 保育園でやったラーメン屋さんを家でも作りたいと言って、即席ラーメンだけ一緒にやってみた 下の子が見てるとやりたがるから、(上の子を)台に乗せて可能なところだけは手伝ってもらっている 保育園での寿司屋に続いてのシリーズがあり、子どもがパン屋をやる 保育園での寿司屋に続いてのシリーズがあり、クレープを作る 保育園での寿司屋に続いてのシリーズがあり、おにぎりを作る (保育園のおかげで)こうやってやってるんだって。新しい発見があった (流しそうめんをやって)親も子どもも楽しんだ
		お米とぎをやる	子どもがお米とぎをやりたいと言うので家でもやらせている(3) (下の子もお手伝いをやりたがるので)長男だけがいるときだけお米とぎをやってもらう 保育園でのお米とぎを見て、家で無洗米だったが普通のお米を買ってといってもらった
		配膳をする	子どもがお当番に憧れがあり、それをやるのがかっこいいみたいなイメージがあるらしく、年長さんになってから家で配膳をしてくれるようになった 保育園での上の子の憧れの配膳の当番を家でも同様にする
		保育園の当番をやりたいと親に言う	下の子は上の子と同じ手伝いがやりたい 子どもから手伝いたいと言ってくる 子どもからお手伝いやりたいと言う 子どもから(お手伝い)やりたいと言ってくる

表6 母親回答 食事作り場面での親子のかかわり

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	発言
食事作り場面での親子のかかわり	母親と子どもの食事づくりの関わり	子どもと一緒に一緒に買い物に行く	家族と一緒に買い物に行く(3) 子どもと一緒にスーパーに行く 子どもと作りたいものを企画して買い物をする 子どもとスーパーに行く 何を使ったらこれができるよっていうところまで教えるゆとりがないが、スーパーでは子どもにかごとって入れさせる
		野菜づくり	家で野菜を育てている 家で夏野菜を育てている 子どもと野菜を収穫して洗う 畑で野菜を育てている 畑で野菜を収穫している 家でトマトを植えている
		祖父母と野菜を作る	祖父の畑で野菜を収穫する 祖父が畑をやっているの、そこにたまに連れて行って、一緒に野菜の収穫をしている
		食べたいメニューを聞く 食事づくり	子どもに食べたいものを聞く 子どもがにんじんの皮むきを手伝ってくれる 子どもと一緒に焼き肉のたれ作りをしている 料理教室を活用して、家で子どもと食事を作っている 一緒に料理をする 一緒にみそ汁を作る 子どもに春巻きの皮をまいてもらう 子どもとシュウマイ作り 子どもと一緒になすの塩もみを作った 一緒にみそ汁を作る 餃子と一緒に作る(2) 子どもとピザ作り(2) 家で流しそうめんをやった 兄が自分でお弁当のおかずを詰めて、おにぎりを作っている お兄ちゃんがご飯を炊いたり、炒め物をしてくれたりしてくれる
		調べて一緒に作る	(子どもとスーパーに行ったとき)グミ作れるのと子どもに聞かれて、調べて家で作ってみた 子どもにナンが作りたいと言われて、ネットで調べて作った
		包丁を使わせる	子どもが包丁を使って野菜を切りたがるのでやってもらう 包丁を使わせる 子どもが包丁を持ちたがるので使わせている
		子どもに味見をさせる	子どもに味見をするのが好きみたいで、一緒に作ったみそ汁を味見をさせている 子どもがグリーンピースをさやから出すときに、ママ聞いている音がするからと、すごい楽しんでる
		子どもが調理に関わると食べる	子どもが自分で料理を作ると食べる つまみ食いをよく食べる 子どもが作った餃子はみんなで食べた 普段は食べないからでも、子どもが自分で作った餃子のには食べる 保育園で野菜を食べるのに、家では食べない
	後片付けに関わらせる	子どもが食事の後片付けにかかわる	子どもには自分のものは自分で食べたものを片づけるようにしている 子どもが自分で作った料理を祖父母に提供する
	アウトドア	キャンプ	キャンプでは家族それぞれ調理の分担がある キャンプでは料理は自分と子どもがやっている キャンプで季節によって食材を変える キャンプで食べ物の内容を変えている
		バーベキュー	バーベキューになると夫ははりきる
	調べる		子どもと一緒に図書館に行く 子どもが図鑑を買ってと言う 子どもに野菜の花の色を聞かれて、わからなかったため一緒に図書館に行って調べた 子どもからどんぐりについて教えてもらう 農家さんに野菜の花の色について聞く (野菜の花の色を調べて)子どもが自分で調べてまとめて発表した

表7 母親回答 母親の食事づくり行動

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	発言
母親の食事づくり行動	手作りをしている		朝は時間がないので、パンやウインナーだけの簡単なものでも作っている 朝も夜も自分が作っている (子どもが麺類しか食べないので)どうせならと簡単だけど家で作っている 子どもが外食のものを食べないので、簡単なものだけ家で作っている なるべく家で食事を作っている 手間をかけない方が食べる(きゅうりに味噌つけた方が食べる) 食事は手作りをしている(2) 夫が外食に行きたがっても、今日は家にしようみたいな感じで最近では家で作るようにしている(家族揃っても家で食べるようにしている) 冷凍はせず、作ったものを食べさせる
	だしをとる		だしをとる(3) 行事のときにだしをとる 二番だしまでとる 煮干しでだしを取っている
	家庭の調味料の違い 朝ごはんの工夫		めんつゆを使ったことがない 朝は魚を出している 朝はごはん、味噌汁、魚を出すようにしている
	食材のこだわり		味噌を取り寄せたりしている カルシウムと思って、いりこの粉を入れている 塩麴やしょう油麴を作っておいて食事の時に使う
	料理の工夫		めんつゆを胡麻和えに使うと甘くなる だしを取る時間がないので、食べるだしを使用している (子どもが乳製品アレルギーなので)家では和食を出している 嫌いなものは作り方を変える 好き嫌いをなくさせるために様々な食材を使っている なるべく30品目とれるようにしている 食事に魚を週に1、2回は取り入れる
	うす味にする工夫		食事はうす味にしているようには気をつけています 給食を食べることで、自分の作る料理の味の濃さに毎回ダメだと修正をかけている 作る食事は減塩にしている 塩分控えめの食事を作っている 手間をかけてごはんを作っている
	作り置きする		作り置きをして1品多く出す (夜勤があるので)食事は作り置きしている
	野菜を出す工夫		野菜とれるように心がけている 子どもの嫌いなものを料理に工夫して入れる(ハンバーグに混ぜる、カレーに入れる) 具だくさんの煮込みうどんを作って、野菜を食べさせている 味噌汁は具だくさんにして、野菜を食べさせる 食事に野菜を取り入れてる 美味しいごはんを作る 夫の家の良いところも取り入れる
	栄養バランスを考えた食事づくり		栄養バランスのとれた食事を考えている 栄養バランスを考えた食事を出す 子どもと夫の嫌いなものを除いた、家族の食べられる料理を出すようになってしまっている
	子どもの食への配慮	市販品 ジャンクフード店には行かせない おやつの種類 おやつ制限 役割分担をする	使う市販品は気にして利用している ジャンクフード店には行かせないようにしている おやつはせんべいや団子など和のものにしている お菓子などはあまり与えない 夫に子どもをお風呂に入れてもらっている間に、夕飯を作る
	料理教室への参加		料理教室で子どもと一緒に味噌を作っている

表8 母親回答 父親の食事づくり行動

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	発言
父親の食事づくり行動	夫が朝ごはんを作る		朝ごはんは夫が作っている 夫が朝ごはんとお弁当を作ってくれている 朝ごはんは夫に作ってもらう
	夫が夜ごはんを作る		夫が夕飯を作ってくれる 朝は自分が作って、夜は旦那が作っているので夕飯を作ったことがなかった
	父の食事づくり		夫が家で何回か料理を子どもとしてくれた (夫がオムライスがすごい上手なので)オムライスの日は夫に作ってもらっている 揚げ物の時、夫と分業してやってもらう
	父と子の食事づくり		父と子と一緒に家事をやってくれる 夫がたこ焼きを子どもと姪っ子のために作る
	夫の家での家事の役割		夫が料理を作ったときは褒めている 夫が洗濯とか食事とかできるところは全部やってくれる 夫には(お月見団子のたれのような)得意分野はお願いしている ご飯を炊くのと片付けは夫がやっている
	夫の料理の特徴		夫のごはんは私より手の込んでいるもの(ソーセージでもゆでるだけじゃなく、とろけるチーズをのせるなど) 夫の料理はちゃんと分量もはかるから私よりおいしくできちゃう 夫は料理をレシピ通りに作る 夫が流しそうめんの準備をしてくれた お月見団子を作ったときに、私が上手じゃないたれを夫が作ってくれた 夫の料理はマメである 夫の料理は(分量もはかるので)マメだと思う
	食べたいメニューを言う		夫が食べたいメニューを言う 夫に食べたいメニューを聞く
	感想を言う		夫は子どもが作った料理を食べて褒める
	褒めたり、有難さを伝える		夫が(お米を残したことを)行儀悪かったよと反省を促す 夫が料理を作ったときは褒めている

(2)父親の家庭での食育

食べる場面での親子のかかわりとしては(表9)、まず、家族と一緒に食べることを共有し、「家族と食について話す」「子どもが保育園での活動を父親に伝える」ことを重視していた。また、「自分が食べるモデルになる」ことを大きな役割として認識していることも明らかになった。食べる場面での父親の援助としての声かけもみられた。

食事作り場面での親子のかかわりとしては、保育園での活動と連動した家庭での食事づくりが展開されていた。具体的には、当番をやる、配膳をする、包丁を使う、料理を使う、味噌を作る等である。前述したように、食卓で子どもから保育園での活動が父親にも伝わっていたり、保育園からの活動内容の発信の成果もあり、家庭での父親と子どもの食事づくりを通したかかわりに直接反映していること、さらに、食事づくり、野菜づくり等も活発に実践されていることが明らかになった。

父親(自分)の食事づくり行動として(表10)は、盛り

付けを工夫する、手作り、うす味にする、作り置きする、野菜を出す、栄養バランスを考えた食事づくり等の工夫もみられた。こうした積極的な食事づくりへの参加がみられる一方で、「作れないものがある」「料理はほとんどしない」という声も抽出された。子どもの食への配慮として、アレルギー、果物をとること、乳製品をとる、多くの食材をとる、野菜をとることがあげられたり、スナック菓子は食べさせない、添加物はあまり摂取させない、中食は控えるといった点への配慮もされていることが明らかになった。食事づくりへも参加の理由には、妻への配慮で妻をリフレッシュさせる、自分の時間を作るという目的があることも食事づくりに関わるという背景も抽出された。

表9 父親回答 食べる場面・食事作り場面での親子のかかわりと食事援助

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	発言
食べる場面での親子のかかわり	家族で一緒にご飯を食べる	朝や夜にごはんを一緒に食べる	朝ごはんを子どもと一緒に食べている 朝と夜は一緒に食べている 家族一緒にごはんを食べるようにしている 子どもが作ったものは食べる
		子どもと一緒に作ったものを食べる	テーブルに置いてある食事を一人で食べている
	父親だけで食べている 家族に食について話す	感想を言う	朝ごはんで子どもと会話をする 家族とご飯の時に会話をしようとしている 子どもが自分が作ったものを食べさせて、父親に食事の感想を求める 子どもがご飯を残さず食べて、父に残ってない？ 食べたいメニューを言う 自分は嫌いなものがあるが、子どもには食べたほうが良いと伝えている
		食べたいものを言う	父親がご飯を残さず食べる 好き嫌いをなくして食べようと思っていたけどできなかった
	自分が食べるモデルになる	残さず食べる	子どもがイナゴの作り方を父に話す 子どもがイナゴを食べた話を父にする 保育園でのマスを手づかみで捕まえた時は誇ら
食べる場面での父親の援助	子どもへの食の援助	声かけ	野菜を食べさせるために声掛けを行っている 野菜を食べないときは、食べるように声掛けをしている 子どもにバランスよく食べなさいと言っている
		行動	(時間がなく、手を出して食べさせてしまうが、)自分から食べてほしい
食事作り場面での親子のかかわり	保育園での活動と運動した家庭での食事づくり	当番をやる	子どもが保育園での当番を家でも真似してやる 子どもからお手伝いしたいと言う 保育園での当番を家庭でもやる 保育園での食育を家庭でもやっている
		配膳をする	子どもには配膳してもらっている 子どもの食事づくりに包丁を使わせている
		包丁を使う	子どもが自分から手伝いたいと言って包丁を使い始めた
		料理を使う	子どもが「僕が当番をやる」と言って料理を手伝
		味噌を作る	味噌作り 保育園でやった活動を家庭で子どもからやってみたいと言う 家で梅ジュースをつけている(2)
	父親と子どもの食事づくりの関わり	食事づくり	ホットケーキ作り 十五夜の日子どもとお団子作りをした 父と子どもでお団子作りをした 誕生日や母の日に、子どもと一緒に食事を作った 朝、一緒に子どもと飲み物をつくる 行事に関する食事を作る
		野菜づくり	祖父母の畑で野菜作りを行っている 野菜の収穫をしている 小さいが家庭での野菜作りをしている 子どもとの野菜の収穫をした 収穫した野菜の下処理をする ブレンダーで野菜作りをしている 子どもと一緒に釣り堀に行く 畑で野菜作りをして食べた 園で野菜作りを始めたから同じタイミングで植えてみようかなという感じでやった
		バーベキュー キャンプ 買い物へ行く	休日はバーベキューをする 家族でキャンプに行っている 家族と一緒に買い物をする 買い物と一緒にに行く

表10 父親回答 父親（自分）と母親の食事づくり行動

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	発言
父親(自分)の食事づくり行動	食事を作る	朝食づくり	朝食を作っている 朝ごはんや弁当を作っている 朝ごはんを作っている
		夕食づくり	夕食は作っている
		手伝いをする	簡単な料理は作っている 普段から食事づくりに参加している 料理を手伝っている 父親が食事の支度や準備をする 料理は手伝いながらやっている
		食事づくり	食事は家で作って食べさせる 魚はさばくことができる 子どもの好みを尊重して食事に取り入れている 簡単なもの(焼きそば、チャーハン)だったら食事が作れる ゆでるなどの簡単な作業だが、食事は作っている 結婚してからも料理は妻より多く作っている 子どもといわし団子やアジのたたきを作ったことがある 卵焼いたり、ウインナー焼いたりしている
		作れないものがある	煮物とか作れない 食事に作れるものと作れないものがある
		料理はほとんどしない	料理はほとんどやらない(2)
	料理の工夫	盛り付けを工夫する	自分が食事を作る時は、見た目を工夫して盛り付ける
		手作り	手作りのものを作ることで素材そのままを生かしている
		うす味にする工夫	子どもへの料理は塩分少な目に作っている
		作り置きする	作り置きしている
		野菜を出す工夫	みそ汁に収穫した野菜を入れている
		栄養バランスを考えた食事づくり	野菜とたんぱく質のバランスをよく摂るようにしている
	子どもの食への配慮	アレルギー	子どもにアレルギーがあるので、卵には意識して食べさせるようにしていた
		果物をとる	子どもに果物を必ず食べさせることを気を付けている
		乳製品をとる	子どもに乳製品を必ず取ることを気を付けている 乳製品は必ず摂取させている
		多くの食材をとる	子どもに多くの食材を取ることを気を付けている
		野菜をとる	野菜を品目とれるようにしている
		スナック菓子は食べさせない	スナック菓子はあまり食べさせない 子どものお菓子の食べ方を制限している 子どもには添加物が入っているものはあまり食べさせていない 子どもにお菓子や清涼飲料水はあまり食べさせない 子どものおやつを量を気を付けている
		添加物はあまり摂取させない	添加物が入っていないようなだしを使っている
		中食は控える	中食はできるだけ控えている
	妻への配慮での食事づくり	食事づくり	自分が困らないように、妻をリフレッシュさせるために食事を作る
		洗い物をする	料理を作るのは妻で、洗うのは自分というパートがある
		家事を行う	自分の時間を作りたいために家事をやっている 妻がそろそろまづいになってというのがちょっと見えてくるため、家事を行う
		家事が嫌いじゃないからやっている	家事が嫌いじゃないからやっている
母親の食事づくり行動	妻と子の食事づくり	おにぎり作り ホットケーキ作り クレープづくり	妻と子どもがおにぎりを作っている 妻と子のホットケーキ作り 妻と子どもがクレープづくり 夜は妻と子どもが一緒に食事を作っている
		味の付けの配慮 食事がかぶらないようにする だしをとる	食事の味付けを薄くしてもらっている 妻は食事がかぶらないように配慮できている 自分はだしを取ったことはないが、妻は取っている
	家族の食事づくり		家族がごはんを作ってくれる 自分で食べるものを作らせる

2) 保護者の「子どもの食を支える力（態度・スキル・食事観など）」

(1) 母親の「子どもの食を支える力（態度・スキル・食事観など）」

「子どもの食を支える力」を構成する「子どもの食育に対する母親の態度」として、食べ方を強制するのは良くないとしつつも、食事のマナーを教えたい、一緒に食事を作りたい、調理に関わらせたい、子どもに家の味を伝えたい、食のありがたさを教えたい、食と命とのつながりを教えたい、食文化を伝えたいという考えが抽出された。と共に、食育で子どもと一緒に共感したい、子どもの発達の見通しを持つ、子どものやりたいことを親が理解している等の「子ども理解」の重要性が指摘された。

また、忙しい中で、余裕を持つこと、子どものやりたい気持ちを受け止めることをはじめ、根気を持つこと、子どもの調理に関わることを面倒だと思わないこと等の、セルフコントロールができることが「子どもの食を支える力」として抽出できた。

自分（母親）の食べる行動に対する態度として、好き嫌いをしないこと、姿勢を正すこと等食べるモデルとして必要な態度が上がったが、それ以上に、作る行動に対する態度として、手作りにしたい、栄養バランスを大切にしたり、野菜づくりへの関わり等も抽出できた。

さらに、こうした母親の態度の育成に、保育所の食育に対する満足度が高いことが影響している可能性も示唆された。給食への感謝、保育園の先生への関わりに対する感謝、保育園の活動に対する満足度、野菜づくりへの満足度が高く、「保育園での食育を家ですればいいのだ」「園と家庭とのつながりを感じる」「園と家庭とが循環している感じがする」という声も抽出でき、園での保育への安心感、保育士への信頼、食事提供への感謝等が背景にあることもうかがえた。

父親の態度として、父親の食べるモデルとしての役割の重要性、また、父親への不満、父親の食事づくりへの要望、食に興味を持ってもらいたいとの要望が抽出された。さらに、食に興味をもった子どもが父親に影響を与えるという、親育ちの媒介としての子どもの意義も指摘された。

(2) 父親の「子どもの食を支える力（態度・スキル・食事観など）」

自分（父親）の態度として、子どもの食育に対して、一緒に食事を作ることが大切だと認識していること、そして、子どもの食の発達に見通しを持つことを重視していることも抽出できた。また、子どものお手本なる、食べる姿だけでなく、家事をやっている姿を見せたいという想いもあることが明らかになった。自分がもっと食に興味を持ちたい、子どもと関わりたい、子どもの食事を理解したい等の意欲も、「子どもの食を支える力」の大

きな柱となる可能性も示唆された。園や家庭での食育での子どもの様子に影響を受け、父親自らの食の意識が変わったという認識や、食べ物を大切にしたい、子どもの次の世代の文化継承になることへの認識が高まっていることも抽出でき、一食、一代、次世代へという軸の気づきも生まれていた。

さらに、保育園での食育に対する満足度から、保育園に参加することが重要だ、保育園での食育に感謝している、園での親子の活動への期待している、保護者どうしのつながりや、地域と関わりを持ちたいという声も聞かれ、家庭、園、地域のつながりを親自身の認識が高まっていくことも確認できた。

自分（父親）の作る行動に対する態度として、栄養バランスを考えることができていない、買い物ができるスキルがないことへの認識を持っていること、また、献立がたてられるようになりたい、食事を作ることができるとよいといった意欲を持っていることも明らかになった。

3) 保育園で実践されている食育、それに対する満足度 (1) 母親が認識する保育園で実践されている食育、それに対する満足度

経験的に食べることを学んでいける保育園の環境構成として、第一にかかげられたのは、「安心でき、評価の高い給食がある」ことであった。そして、「園でおいがする」「食物とつながった園舎・園庭があること」「絵本も時期にあったものを選んでくれている」「農家の方等、地域と食によるつながり」があることが抽出された。こうした中で、「保育園には子どもが経験的に学んでいける環境が整っている」という高い評価と、信頼を得ていることも明らかになった。

保育園での具体的な子どもの活動としては、「保育園の給食によって子どもの食べる行動に影響が大きいこと」、数多くの野菜づくり、食事づくり、食事の準備に関わっていることを実感として理解していた。

さらに、こうした活動が友達とのかかわり、保育士のかかわり、給食の先生が子どもとのかかわりによって成り立っていることも認識していた。その結果、「食の知識を高めている」「子どもが親に園での活動（喫食量や食育活動）を伝えていと認識している」が抽出できた。

保護者に対する支援として、給食試食会や、給食を食べる姿を参観したり、野菜作り・食事づくりに参加するなどの保育参加・参観が重視されていた。また、保育園だより・献立表の配布、活動の掲示、保育士が親に喫食状況を伝える等により、保育園から保護者への情報提供が重要な役割を果たしていること、食に関して困ったことを先生へ相談・助言することができる等、信頼関係が築かれていることも明らかになった。

表11 母親回答 自分の態度（その1）

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	発言
自分（母親）の態度	子どもの食育に対する自分（母親）の態度	食べ方を強制するのは良くない	野菜を食べないので食べなさいと食べさせたが、子どもが涙目になっても飲み込めず、食育は難しいと思っている 食事はコミュニケーションをとる唯一の時間だが、なかなか子どもを話して食べてくれない 子どもに食卓で強制的に食べさせるような気持ちにすると、食事があんまり好きになれるのになって 無理に嫌いなものを食べるのではなく、食べられるものを食べればいいんだ 無理に野菜を食べさせて家でのごはんが楽しくなくなるのも嫌だ 嫌いなものをこまかくすよりは、食べられるものを食べてくれればいい 子どもが野菜を食べなくても、しっかり成長し、排便もあるから栄養バランスを重視しすぎることに重きを置いていない 食事のマナーを教えてあげなきゃいけないと思っているが、言い過ぎもよくないと思っている 食事を待たせるときはテレビを見させてしまっているけど、よくない
		食事のマナーを教えたい	子どもと一緒に食事を作りたい 子どもが生まれて一緒にクッキーつくったり、パンつくったりしたいと思っていた（子どもと作るのが憧れだった） クッキングを家でもやらせたい 子どもがやりたいことを馬鹿にしないことが大切 小さいころから食事づくりに関わらせることは良いことだ （小さいころから食事づくりに関わらせることは良いことだけだ）無理やりやらせるのではなく、長い目で見て仲良くできればいいと思っている
		一緒に食事を作りたい	好みの味とかを子どもに味を伝えていかなきゃなと思っていて （生きていたものを殺して食べるから、残さない、ありがたいと思って食べなくちゃいけないということを教えると）食べ物に対して興味がわくと思う
		調理に関わらせたい	生きていたものを殺して食べるから、残さない、ありがたいと思って食べなくちゃいけないということを教えたい 子どもに日本の伝統を教えたいと思っている 子どもに伝えられるものは伝えていきたい なんとなく文化的な食文化を子どもに伝えていきたい 食は家のカラーが出るんだろうなって 食事がどういう風にできているのか教えておこうと思う そうだねって子どもと一緒に共感することですかね 上の子のときは食べなきゃダメとか言ってたが、（いずれ食べるようになるので）下の子では食べなくてもいいよって甘やかしている （遊び食べをしているが）年齢が上がれば自然と、上の子もやってたなと思えばいいかなって 野菜が嫌いでもいつか食べるだろうと思っている
		子どもに家の味を伝える 食のありがたさを教えたい	子どもは食材が変わるのがすごい好き 子どもは食材の変化（米がおもちになるような）サイエンスショーみたいなものを好む
		食と命とのつながりを教えたい 食文化を伝えたい	ピザづくりは子どもが自分で作れるので楽しい ピザ作りの生地が気持ちいい
		一緒に共感したい 子どもの発達の見通しを持つ	（お米とぎや配膳を子どもがやりたいと言うが）自分の余裕を持たなくちゃいけないなって思っている 心にゆとりを持つ 祖父母がいると時間に余裕ができる 祖父母がいると、気持ちにも余裕ができる 包丁を使って野菜を切りたいがあるのでやらせたいけど、手伝わせる余裕がない 子どもが包丁を使いたがるが、その余裕がなかなかない
		子どものやりたいことを親が理解している	子どもたちはクッキングをやりたい気持ちがすごくあって、やらせたいが働いていると難しいなって思っている 子どもからやりたいと言われたことはできる限り応えたい 子どものやりたいお手伝いは余裕がある時はやらせられるが、余裕がないときはさせれない 素直な流れというか、子どもに無理がないし自分も無理しないっていうか、楽しいことがあったら家でもやろうねの方がいいのになって思う なぜここに、どうして今みたいな（余裕がないときに限って子どもがお手伝いをやりたいがる） 子どもにやりたい気持ちにさせる
		セルフコントロールが大切	自分に必要なのは料理のスキルより根気を持つこと 子どもの食事づくりをやりたいということをめんどくさいと思わない 子どもがやりたいことをめんどくさいがらないこと めんどくさい気持ちにならないようにする お手伝いをさせると、なるべくあああって言わないようにしている 子どものやりたいことを大変だと思わない 子どもにお手伝いをやらせてあげたいが、今は忙しいんだな～みたいな
		余裕を持ちたい	
		子どものやりたい気持ちを受け止めたい	
		根気を持ちたい	
		子どもの調理への関わりが面倒だと思わないようにしたい	

表12 母親回答 自分の態度（その2）

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	発言
自分（母親）の態度	自分（母親）の食べる行動に対する態度	好き嫌い	子どもの手前、嫌いとかちよっと、あんた食べなさいよって言ってるのに、自分が食べないわけにはいかない 私が違うものを食べていると欲しがったりとか違うってことが子どもが分かるようになってきた
		姿勢を正す	子どもがごはん食べながら寝っ転がってるので、まずは姿勢を正していきたい
		食環境を整える 家族で会話をする 家族で食事を考える	テレビをつけて食べさせるのはよくない 家族でコミュニケーションをとることができることはいいことだ 食事を家族で考えることはいいこと
	自分（母親）の作る行動に対する態度	手作りにしたい	自分でできる手作り料理はやってみようかなと思っている 保育園でやっている味噌作りを家庭でもやりたいと思う 朝ごはんを作りたいと思っている 家族の食べたいメニューを作りたい 食事は栄養バランスを考慮することが大切である むね肉をささみにするべきなのか等カロリーについて悩んでいる 食事の味付けをどこまで濃くていいのかわからない 自分が嫌いなものを料理で工夫できる力をつけたいといけ 田舎に生えているフキノトウやミョウガを家で植えたい （よもぎを自分ではこわくてとったりやったりできないが）やろうかなとは思っている よもぎがよくわからなく、こわくてとれない （片づけがめんどくさいので、お金を払って後片付けしなくてよい料理教室に行っているが）めんどくさいって思わないようにしなきゃいけない
		味付け 料理の工夫 野菜づくり	
		食事の後片付けへの負担感	
自分（母親）の態度	保育園での食育に対する満足度	給食への感謝	給食がおいしくてすごいありがたいなって （給食では、子どもは）お友だちの前で褒められたいんですよね 保育園の先生が（子どもが納豆まみれになったのにもかかわらず）おおらかな目で見ていただけているのも感謝感謝で （保育園の先生は）身の回りのもので子どもたちが気付いたことをひろって、みんなでやろうと広げてくれるから本当にすごいなって 縦割り保育だから子どもたちは勝手に上の子が教えてくれていて安心 不思議と思ったからそこから発見して、自分たちこうしたいっていうのを実現に向けて先生方がやってくださる 子どもの気持ちを尊重してくれる 保育園の先生が味噌は簡単にできますよと言ってきて、やってみようかなって思った 保育園では、子どもらしい生活を送らせてもらっていて良い 保育園の給食のおかげで子どもの食べられないものも食べられるようになった （保育園のおかげで）すごい私たちも楽しい。
		保育園の先生への関わりに対する感謝	（保育園の給食は完食に近いと聞いているので）子どものモチベーションの問題かなと感じている （給食で使う食材を調理室に子どもたちが持っていくことを）やらせてくれるのがすごいありがたい 子どもは売ってあるものなんでも作れるという感覚がある 小さくてもお米とぎもできるという発見があった イナゴを食べる経験は普通させてもらえないし、自分じゃ絶対にやらないから感動した 家でできない経験を保育園ではしている(4) 家じゃできないこと全部教えてくださったり、やってくださったりしてくれているからありがたいと思っている 子どもはあのキャラクターが好きみたいなのになっちゃうような年代だけど、それを超えて、家だけじゃ経験できないことをさせてもらえてるから感謝している
		保育園の活動に対する満足度	工程を経て作る体験が良い 食べるものが身近にあることは良いことだ 食材の触り心地や音を小さいときにやらせてもらえるのがすごく良い （地域の畑の）食材を触らせてくれることがありがたい （子どもが食材に対して）臭かったとかいい匂いだったとか言うのがすごく良い 子どもたちは、野菜は農家の人が一生懸命育てたことを知っている 子どもたちは、農家の人が作ってくれた野菜は残さないように食べた方がいいていうのを気にするようになった 畑や農家さんがいる 地域に畑があることがありがたい 親も子どもと同じように農家の方の畑で遊びたいと思っている 保育園でやったことを家ででなるべくやっていけばいいんじゃないかと私は思ってた （保育園でやったことを家ででなるべくやっていくことで）相乗効果でよくなるんじゃないかなって思ってます （不思議と思ったからそこから発見して、自分たちこうしたいっていうのを実現に向けて先生方がやってくださるので、）情熱を自分も持ってなきゃいけないと思っている 保育園と家庭はつながっていて、その線上で家の生活もありみたいなの（保育園と家庭が）すごい循環している感じがする
	保育園での食育を家ですれば良い	野菜づくりへの満足度	
	保育園での食育を家ですれば良い	園と家庭とのつながりを感じる	

表13 母親回答 父親の態度

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	発言
父親の態度	父親の食べる行動に対する要望	食事の食べ方のモデルに 栄養バランスを考える 一緒に食事をする	夫には子どもに食べ方を真似されてもいいように食べてほしい 夫は食育の邪魔をする(食育の邪魔をしないでほしい) 夫がごはんの前にお菓子を食べるから我慢してほしい 栄養バランスを考えた食事食べてほしい 夫に料理は栄養バランスを考えてほしい 夫に食事を一緒にしてほしい 自分が食事を手作りするようになって、夫の意識が変わってきたような気がする
	父親の食事を作る行動に対する要望	食事づくりをしてほしい バーベキュー 力仕事をしてほしい 栄養を考えてほしい 食べたいものを言ってほしい 一緒に買い物に行く	夫に家で料理を作ってほしい 朝は夫に手伝いや準備をしてほしい 結婚してから夫は料理をしなくなってきた 家で夫が料理を作ることがなくなってしまって、私よりも料理がうまいはずなのに(作ってほしい) 料理を全然やってくれない(料理を作ってほしい) 料理を作れるようになってほしい 夫との食事の分かれ目のきっかけの一つは離乳食だと思う(離乳食から一緒に食事でなくなった) 夫が食事を作ると、(ちらかすので)ちょっとそれやめてと思う 夫には食事づくりではなく、子どもと遊んでほしい 夫にはバーベキューで頑張してほしい 男性には力がある餅つきや炊き出しのような仕事をやってほしい 夫には、力仕事など自分ができないところは手伝ってほしい 夫にはお父さんとして尊敬される立ち位置に、重いもの持ったりとか、母にできないことをしてほしい 男の人だと、買ってきたものを食べるとかあまり栄養素を気にしたりとかそういうものない 夫に食べたいものを言ってほしい 父と子どもで買い物に行きしてほしい
	父親への不満		夫は材料に生クリームと書いてあったら生クリーム買ってくる 夫が買い物をするとう食材が余る 夫は夕飯を作ってくれるが、片付けができない 夫はパン作りとか参加するんですけど、ちょっとやって飽きて、やらなくはないけど、関わってはくれる
	食に興味を持ってもらいたい		夫にも家で作る大切さをわかってほしい 夫は食に関する態度が低い 夫には今より食に関して頑張してほしい 女性だけが家事もすべてやるのはおかしいと思う 食に興味を持ってほしい 食に関心がある人は食べることが好きですね(子どもに食に関心を持ってもらいたい) 夫がやりたい気持ちになったことをさせる
	子どもが父親に影響を与える		夫は好き嫌いが多いが、子どもが頑張って嫌いなものも食べるので、ちょっと刺激になってる 子どもが保育園で経験的に学んでいること(じゃがいもの芽に毒があるみたいな)に気付いてないので(気付いてほしい)

表14 父親回答 父親の態度

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	発言
自分（父親）の態度	子どもの食育に対する自分（父親）の態度	一緒に食事を作る	本物の包丁を使わせることは大切だ 子どもと父と一緒にごはんを作ることで、子どもは食に関心がいくと思う 子どもが楽しそうにやっているの、子どもと一緒に食事づくりに参加したいと思っている
		子どもの食の発達に見通しを持つ	子どもが大きくなれば好き嫌いはあるが、栄養バランスのとれた食事をとるように言えばとってくれるようになっている 子どもが自分で考えていろんなものを食べるようになってきたので、下の子に期待している 上の子が大きくなって、下の子が生まれてま、いっかって思えるところも出てきて、上の子のきりきりした感じはなくなった
	子どものお手本なる	家事をやっている姿を見せたい	父親が家事を積極的に行うことは、次世代の子どもたちがどう育つかっていうのがすごく重要 父親が子どもに家事をやっている姿を見せることが重要 子どもに家庭での父親を見せる 父親が子育てに参加することは子どもにとって大きい 子どものお手本になるようにする
		自分の親が影響している	自分の父が家事をやっていなかったから反面教師なんだと思う
		朝ごはんを食べる姿を見せる	自分が朝ごはんを食べることが重要だ
	食に興味を持ちたい		父自身が食にどん欲でなく、よくないからどうにかしないと思っている
	子どもと関わりたい		子どもとゆっくり関わりたいと思っている
	子どもの食事を理解することが重要だ		子どもの食に関してはなかなか手が出しづらい（妻は子どもに与えるものは吟味しているのを知っているが）自分は子どもに与えていいものとダメなもの分からない
	子どもの影響を受け、食の意識が変わった	食への意識が変わった	子どもの様子を見て食への意識が変化した
		食べ物大切にしたい	子どもが保育園で食材を作る大変さをさせてもらっているの、食べ物を粗末にしないことを大事にしていきたい
		文化継承になることを理解した	自分の子どもから、またさらにその先まで伝わることだと改めて今思いました

表15 父親回答 父親・母親の態度

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	発言
自分（父親）の態度	保育園での食育に対する満足度	保育園に参加することが重要だ	食育などは保育園に任せている 父親が保育園の活動に参加する 父親の保育園に行く頻度を高めることでいろんな情報が入ってきて、それは父にとって大きいこと
		保育園での食育に感謝	（保育園に男性職員がいるので）保育園に父親と母親の役目があってもよいことだし、感謝している 子どもは保育園で食に接する機会が多いから家でも手伝いをやってくれるのではないかと思う 自分は子どもの頃に食育をした記憶がなく子どもがうらやましい 保育園で育っている野菜を見て、収穫する体験は子どもにとって大きいことで、食につながること 子どもが保育園で友だちとご飯を食べることはすごく大きいこと
		親子の活動への期待	保育園で父と子でやる活動が楽しければ、家でもやろうとなると思う
		保護者とおしのつながりを持ちたい	保育園の活動を家でやることは子どもにとって良いことだ おやじバンドがうらやましい 保育園がきっかけに父同士の仲間作りをしたい 父同士の関わりを持つきっかけがほしい
		周囲と関わりを持つ	保育園をきっかけに地域と関わりを持ちたい
	自分（父親）の食べる行動に対する態度	朝ごはんを食べる	自分が朝ごはんを食べることが重要だ 献立を考えられる妻はすごいと思う （自分の上司が）夕食は一家団欒で食べているのを見てそういうもんだと思った
		一緒に食事をする	
	自分（父親）の作る行動に対する態度	献立がたてられるようにになりたい	献立の計画を立ててやりくりできれば、子どもにも食べなさいと説得力ある言い方ができる 1週間とか見通して献立を考えることは無理
		食事を作ることができるとうい	父親が料理ができるといいとは思っている 手作りの食事を食べさせることが大切だ 料理は結果が出てしまうが、洗い物は乾けばいい話なので、料理は難しい
		簡単な作業が男性の仕事だと思う	洗い物など簡単な作業が男性の仕事である
		栄養バランスを考えることができていない	子どもに食べさせているものが朝はパンにジャム、夜は納豆にご飯といった食事なので反省している お腹を満たせばそれでよく、栄養バランスなんか考えたこともない
		買い物ができるスキルがない	一週間のお菓子だったら買える（父の買い物のスキルがない）
		食材の価格に対する価値	良い食材は高く、家計とのバランスもあるからあまり高いものを買ってしまうと食費があがってしまう
		野菜づくりをしたい	野菜作りの体験 家庭で野菜作りをする 食に関わる体験を行いたい 子どもに食べるものの源を見せてあげたい 野菜も種まきからさせたい 子どもに野菜作りをさせたい 野菜作りをさせたいがマンションに住んでいるため、環境が許させるならやりたい 野菜を栽培できる環境があることがよい
		アウトドア	アウトドアで食事づくりをする姿はカッコいい 食にかかわる活動は良い 一緒に釣りに連れて行きたい

(2)父親が認識する保育園で実践されている食育、それに対する満足度

父親も、母親ほどではないが、保育園において経験的に食べることを学んでいける環境構成が整っていると認識していた。園舎や園庭までに認識は広がっていなかったが、安心でき、評価の高い給食があることへの認識は高いことが確認できた。また、様々な食の学びが保育園で展開されていること、そして、子どもが食に興味を持

つきっかけが保育園にあることを認識していることも抽出できた。

保護者に対する支援として、給食試食会がある、保育参加・参観の場が用意されていること、保育園だよりの配布、活動の公表、写真の掲示により保育園から保護者への情報提供があることを認識していた。母親に比べ、先生への相談・助言に関する意見はなかった。

表16 母親回答 経験的に食べることを学んでいける環境構成

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	発言
経験的に食べることを学んでいける環境構成	安心でき、評価の高い給食がある	給食は栄養バランスが取れている	保育園の給食はバランスがとれている
		給食の味	給食の味がちゃんとするのに、塩分控えめな感じがする
		給食のお米	クラスに炊飯器がある 給食で炊き立てのご飯を出してくれる いろんな種類のお米を出している
		アレルギー児への対応	アレルギーの子も食べることができる食事を提供している(2) 卵やマヨネーズを給食に使用していない
		陶器の食器の使用	陶器の食器を使用している
		給食の量が多い	給食の量が多い
		給食が温かい	温かい給食が提供されている
		給食の野菜が多い	給食の野菜がいっぱい
		給食の食材がよい	給食に魚や納豆を出してくれる
		和食が出ている	和食が出ている
		給食がおいしい	給食がおいしい(5) 保育園の野菜はおいしい
		給食へのこだわりがある	食事が他の園と全然違う 給食は安心感がある 給食に手間をかけていることも把握している 野菜の季節感を重視してくれている 野菜にこだわってやってくれている 限られて予算の中で努力している
	園でにおいがする		だしのいい匂いがする 食材のにおいがする においから季節がわかる 給食室からにおいがする ご飯の炊けるにおいがする 園庭のあんずの木から杏仁豆腐のにおいがする発見がある
	食物とつながった園舎・園庭を通した環境構成	食物とつながった園舎・園庭がある	園庭で果実を食べている レモンの木やミカンの木を知っている 園庭の果物を食べている 食べられるタイミングを見計らっている 園庭にいちじくがある 園庭にさくらんぼの木がある 子どもが子どもに果物を取ってあげる 園庭にあんずの木がある 食べ物が生産にある
	絵本等の環境構成	絵本も時期にあったものを選んでくれている	絵本も時期にあったものを選んでくれている
	地域と食によるつながり	地域の農家の方とのかかわり	農家の方の畑にあるものは安心 農家の方が土をふかふかにしてくれる 農家の方の野菜は無農薬野菜で安心だ
		保育園は経験的に学んでいける環境がある	保育園は経験的に学んでいける環境がある

表17 母親回答 園での子どもの活動 その1

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	発言
子どもの活動	子どもの食べる行動	保育園の給食による 家庭での食べる行動への効果	給食の味を知っているから、家のご飯を食べない 保育園と、家とは、子どもの食べ方が違う 保育園が変わってから急に食べるようになった 保育園では、おかわりがすごい 家では食べないものも、保育園では食べている 保育園で野菜を食べられるようになった
	子どもの行為	歯磨きの習慣がある	食後の歯磨きがある 食後の歯磨きが習慣になっている
	園での食事づくり	野菜づくりにかかわる	収穫した野菜を食べる 保育園で畑をやっている ヘチマが植えてある 野菜作りの体験をしている 野菜の収穫をしている よもぎが植えている よもぎを子どもがとってくる スナップエンドウがおいしい 畑で野菜作り(3) トマトやオクラ、枝豆の栽培をする 保育園から収穫した食べ物を持って帰ってくる 農家の方の畑から持って帰ってくる のびるをとってきた 農家の方の畑に行った時、子どもが様子を伝えてくれる 自分より上のお友だちが植えた野菜を見に行く 野菜への水やり当番をする 保育士が野菜の育ち方を教えてくれている
		食事づくりをする	味噌作り 梅ジュースづくり(3) お米作り 梅干しづくり イナゴを食べる できるものは作っている どんぐりを食べている どんぐりでクッキーを作っている ぬか漬け作り 味噌作り カレーとナンづくり 実際にあんずの種から杏仁豆腐を作って食べた クッキング(3) 梅シロップづくり ハロウィンのお菓子作り スイカ割り だしのとり方を学ぶ機会がある(2)
		クラスで食に関わった食育をしている	クラスでラーメン屋さんをやっている クラスで食に関わった食育をしている
		食事の準備にかかわる	えのきほぐし 根菜類を切る キャベツちぎり 3歳でもスナップむきをしている みんなでスナップむきをする お米をとぐ係りがある お米とぎ(2) ご飯の炊いている(3) 学年の上の子のお米をとぐ姿を見ている
		子どもが配膳にかかわる	配膳している 子どもたちが自分で給食をとって食べている 給食の時に子どもたちがみんなの配膳をする

表18 母親回答 園での子どもの活動 その2

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	発言
子どもの活動	友達とのかかわり		友だちが食べていると嫌いなものも食べる 保育園では友だちがいて競争心があって、食べている 子どもたちが公園に行つて、イナゴを逃がすか食べるかの論争になったようだ 友だちと一緒に食べている 友だちと食べている
	保育士のかかわり	給食場面 保育場面	先生に褒められる 保育園で嫌いなもの食べると先生が褒めてくれる 子どもが食べるかどうかは先生によって違う 先生が嫌いなものを素直に言える環境を作っている 先生も子どもの立場に立って一緒にやってくれる 食材の感謝の気持ちを持たせる食育をしている 保育士が野菜の育ち方を教えてくれる (保育園の先生が)一緒に調べてくれて、決まった枠のなかじゃなくて、じゃ、こっちも行ってみようみたいな関わりがいい
	給食の先生が子どもとかかわっている		給食の先生方が子どもの名前を知っている 給食室から手を振ってくれる 作ってくれる人が身近にいる 給食の先生と関わりがある 給食の先生と一緒に食事をする 給食の先生と給食について子どもが話す機会がある 子どもが給食を作ってくれた人を理解している 子どもが調理員の名前を覚えている 給食で使う食材を子どもたちが調理室に持っていく 調理室と関わりがある 給食室がそばにある
	食の知識を高める	保育園で様々なことを学んでいる	保育園で様々なことを学んでいる
		保育園の食育は初めて知ることが多い	保育園の食育は初めて知ることが多い どんぐりを冷凍庫で保存している
		保育園で本を読んでいる	保育園で本を読んでいる
		発見したことをみんなで調べる	発見したことはみんなで調べる
		保育園でよもぎについて教えてくれている	保育園でよもぎについて教えてくれている
	子どもが、親に園での活動を伝えていると認識している	給食の喫食量について報告してくれる	子どもから給食を全部食べていることを聞いている 子どもが家で食べない野菜やきのこを保育園で食べることを伝えてくれる 子どもが園では食べていると伝えてくれる(2) 全部食べたよと報告してくれる
		園での食育活動について報告してくれる	子どもが親に、給食の作り方を教えてくれた 行事について教えてくれる 収穫した野菜を食べたことを伝えてくれる 農家の方の畑に行った時、子どもが様子を伝えてくれる 子どもが食事で感動したことを伝えてくれる

表19 母親回答 保護者に対する支援

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	発言
保護者に対する支援	給食試食会がある	給食を食べることができる	試食させてくれる 保育参観と一緒に給食を食べる(4)
		懇談会に給食のおやつが提供される	懇談会に給食のおやつが提供される
	保育参加・参観	保育参観に参加する	いつでも保育参観できる 保育参観に参加している 保育参観がある
		保育参観で給食を食べる姿を見る	保育参観で給食を食べる姿が見れる
		保護者が野菜作りに参加する	休日も農家の方の畑に保護者も行っている 保護者もグリーンピースとりに参加する グリーンピースは保護者も食べることができる
		保護者が食事づくりに参加する	味噌作り 父とパン作り 焼き魚の会(3) お茶会 おにぎりの会 おじの会
		保育園から保護者への参加の呼びかけ	休日も保育園が積極的に食育を行ってくれる 保育園から保護者に参加を促す呼びかけを頻繁にしてくれる
	保育園から保護者への情報提供	保育園だより・献立表の配布	保育園だよりにあるレシピの紹介 献立を配布してくれる
		給食の展示	給食の展示に工夫したところや味付けが書いてある
		活動の掲示	イナゴを食べるときの写真を保育園が保護者に見せている 保育園が写真で様子を伝えてくれる 保育園で行った活動の掲示がある
		保育士が親に喫食状況を伝える	給食を完食していると伝える 子どもが給食を食べたときだけ先生が教えてくれる
		ノートによる伝達	先生が保護者に全体ノートで子どもの様子を伝えている
		子どもが作った料理を展示する	保育園で作ったジュースが保護者にも見える所に置いてある
		子どもが作ったものを共有できる	保護者も梅干しを食べる
	先生へ相談・助言	わからないときは先生に聞く	わからないことは保育園の先生に聞く
		母が保育士にメニューを聞く	保育士にメニューを聞く
		食に関して困ったことは保育園の先生に相談する	食に関して困ったことは保育園の先生に相談する
		保育園の先生に園で作っている味噌作りのアドバイスをもらう	保育園の先生に園で作っている味噌作りのアドバイスをもらう

表20 父親回答 保育所で実践されている食育、それに対する評価

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	発言
と 経 を 験 環 学 境 ん に 構 で 食 成 い べ け る こ	安心でき、評価の高い給食がある	だしのにおいがよい だしがしっかり出ている 収穫した野菜が給食に入っている 保育園の給食は立派である 食材の味をすごく大事にしている 保育園での食べ物がおいしい 陶器の食器の使用	だしのにおいが良い だしがしっかり出ている 給食の中に収穫した野菜が入っている 保育園の給食は立派である 食材の味をすごく大事にしている 保育園での食べ物がおいしい 保育園の食器は陶器を使用している
子 ど も の 活 動	子どもの食べる行動	保育園では食べている	保育園では食べている 家では嫌いなものは食べないが、保育園では食べる 保育園では野菜を食べている
	園での食事づくり	野菜づくりにかかわる	遊びの中で植物や食べ物と関わっている 野菜を栽培する体験をする いろいろな植物や食べ物を食べている 食材をつくる大変さを体験する
		食事づくり	梅干し作り(5) もちつき たまねぎの皮むき マスを手づかみで捕まえる 焼魚の会(2) 梅ジュース作り イナゴを食べている
		食事の準備にかかわる	お米をとぐ係りがある 給食の時間にお当番がある
		食に興味を持つきっかけが保育園にある	食に興味を持つきっかけが保育園にある 保育園の食に関する活動は体験型である
	友達とのかかわり	保育園で食べるのは友達の影響がある	友だちの影響がある 学年が上の子が食事の世話をしてくれる
	食の知識を高める	保育園が子どもへ食に関することを教えている	食材のありがたさを保育園で教えている 保育園でお米の神様について教わっている
	子どもが、親に園での活動を伝えていると認識している	園での食育活動について報告してくれ	保育園から子どもの出来事を教えてくれる 子どもから保育園での当番を話す 保育園の梅干を子どもが話してくれる
保 護 者 に 対 す る 支 援	給食試食会がある		保育園で給食を食べている(2)
	保育参加・参観	父親が保育園に参加する	保育園での食育の実際を見ている
		おやつを食べる姿を見る	おやつを食べる姿が見れる
	保育園から保護者への情報提供	保育園だよりの配布 活動の公表 写真の掲示	保育園だよりが月に1回ある 公式ホームページがある 父が関わった活動を写真と一緒に掲示してくれる 保育園から写真の提供がある

4) めざす子ども像

母親のめざす子ども像として食を楽しむ子ども、その具体的な姿には、「お腹がすくリズムのもてる子ども」「食べたいもの、好きなものが増える子ども」「食事づくり、準備にかかわる子ども」「食事について考えることができる子ども」「一緒に食べたい人がある子ども」が抽出できた。母親の方が食の場での人との関わりにも注目していた。

父親のめざす子ども像として、「食に興味を持つ子」、「お腹がすくリズムのもてる子ども」「食べたいもの、好

きなものが増える子ども」「食のありがたさがわかる子」「食事づくり、準備にかかわる子ども」「食事について考えることができる子ども」が抽出された。

以上のように、母親と父親で対象者数が同一ではなかったため、数量的な比較はできないが、家庭での食育と保育園での食育がまさに子どもが鍵となって、循環していることが解明され、園と家庭が子どもを育てあうコミュニティとして機能していることが抽出された。

表21 母親回答 めざす子ども像

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	発言
めざす子ども像	食を楽しむ子ども		子どもには楽しく食べてほしい(2) 子どもには誰かと一緒に食べることで、楽しく食べてほしい 食事の時間が苦痛になってほしくない
	お腹がすくりズムのもてる子ども	遊んでおなかをすかせる	子どもはちゃんと遊んで、その後、食べることが大切だ
	食べたいもの、好きなものが増える子ども	食べてほしい 野菜を食べてほしい 好き嫌いをしない 自分で選んで食べる 本来の味がわかってほしい	子どもに栄養バランスを考えた食事を出しているのに食べてくれない(栄養バランスが取れた食事を食べてほしい) 保育園でも食べない(食事を食べてほしい) 子どもがもりもり食べるようになって安心 子どもには野菜を食べてほしい(2) 子どもがすごい好き嫌いをする(好き嫌いしないでほしい) 嫌いなものをなくさせたい 子どもには美味しく食べてほしい 子どもが自分で選んで食べてほしい 子どもには、大皿にだして自分で料理をとってほしい もともとの味をわかってほしい、これ変だなっていう味覚をもってほしい 子どもにはジャンクフードのような化学的な味に慣れてほしくない
	食事づくり、準備にかかわる子ども	料理を作る 配膳をする	自分の子には料理をしない子になってほしくない 子どもにも将来料理を作れるようになってほしい スーパーでこれを選んだら自分が食べたいものが作れるようになってほしい 子どもには(包丁などのお手伝いではなく)配膳をやってほしい
	食事について考えることができる子ども		子どもには食事のことを考えられるようになってほしい 作った料理にがっかりしないでほしい
	一緒に食べたい人がいる子ども	一緒に食事をする	一緒に食卓についてご飯を食べることが大切になって思いました

表22 父親回答 めざす子ども像

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	発言
めざす子ども像	食を楽しむ子ども		子どもには楽しく食べてほしい(2) 子どもには誰かと一緒に食べることで、楽しく食べてほしい 食事の時間が苦痛になってほしくない
	お腹がすくりズムのもてる子ども	遊んでおなかをすかせる	子どもはちゃんと遊んで、その後、食べることが大切だ
	食べたいもの、好きなものが増える子ども	食べてほしい 野菜を食べてほしい 好き嫌いをしない 自分で選んで食べる 本来の味がわかってほしい	子どもに栄養バランスを考えた食事を出しているのに食べてくれない(栄養バランスが取れた食事を食べてほしい) 保育園でも食べない(食事を食べてほしい) 子どもがもりもり食べるようになって安心 子どもには野菜を食べてほしい(2) 子どもがすごい好き嫌いをする(好き嫌いしないでほしい) 嫌いなものをなくさせたい 子どもには美味しく食べてほしい 子どもが自分で選んで食べてほしい 子どもには、大皿にだして自分で料理をとってほしい もともとの味をわかってほしい、これ変だなっていう味覚をもってほしい 子どもにはジャンクフードのような化学的な味に慣れてほしくない
	食事づくり、準備にかかわる子ども	料理を作る 配膳をする	自分の子には料理をしない子になってほしくない 子どもにも将来料理を作れるようになってほしい スーパーでこれを選んだら自分が食べたいものが作れるようになってほしい 子どもには(包丁などのお手伝いではなく)配膳をやってほしい
	食事について考えることができる子ども		子どもには食事のことを考えられるようになってほしい 作った料理にがっかりしないでほしい
	一緒に食べたい人がいる子ども	一緒に食事をする	一緒に食卓についてご飯を食べることが大切になって思いました

Ⅲ. 専門職が考える保護者の子どもの食を支える力～保育所の専門職対象の自由回答調査から～

1. 目的

本報の目的は、保育所の父親・母親の特性を生かした「子どもの食を支える力」の質問紙票の開発の基礎資料として、保育所の専門職の視点から、保護者にどのような力（知識・スキル・行動・食事観など）が必要なのか、また、支援方法を解明することである。

2. 対象

「保育所の食事を考える研修会」に参加した埼玉県内の保育士・栄養士・調理師等の保育に携わる専門職員（平成28年度保育士会会員：約250人参加予定）を対象とした。

回収できた調査票は85部であった。女性が98%を占め、職務内容としては保育士41%、栄養士19%、調理員14%、主任14%の内訳であった。施設形態としては公立保育園53%、民間保育園32%、認定こども園3%であった。

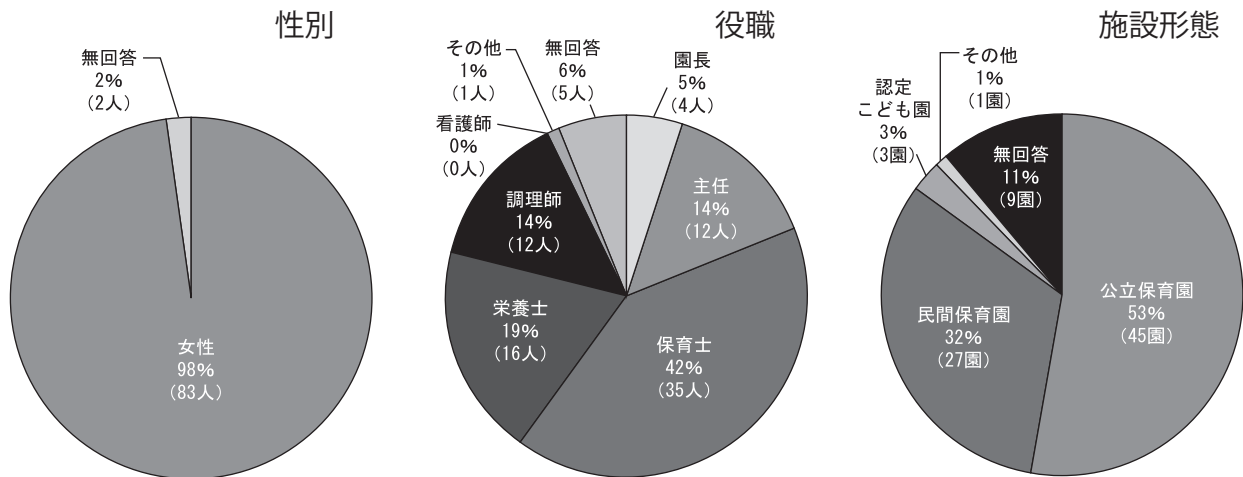


図1 対象者の属性

1) 調査方法

研修会のパンフレットに質問紙調査票を挟み込んでもらい、受付で配布、終了後、回収を行った（回収数85部）。調査内容は属性（性別、経験年数、在園児数、役職、施設形態）と、1)―①子どもの食を支えるために父親に必要な力、1)―②子どもの食を支えるために母親に必要な力、2)―①父親への支援方法、2)―②母親への支援方法についての自由記述回答である。

設形態）と、1)―①子どもの食を支えるために父親に必要な力、1)―②子どもの食を支えるために母親に必要な力、2)―①父親への支援方法、2)―②母親への支援方法についての自由記述回答である。

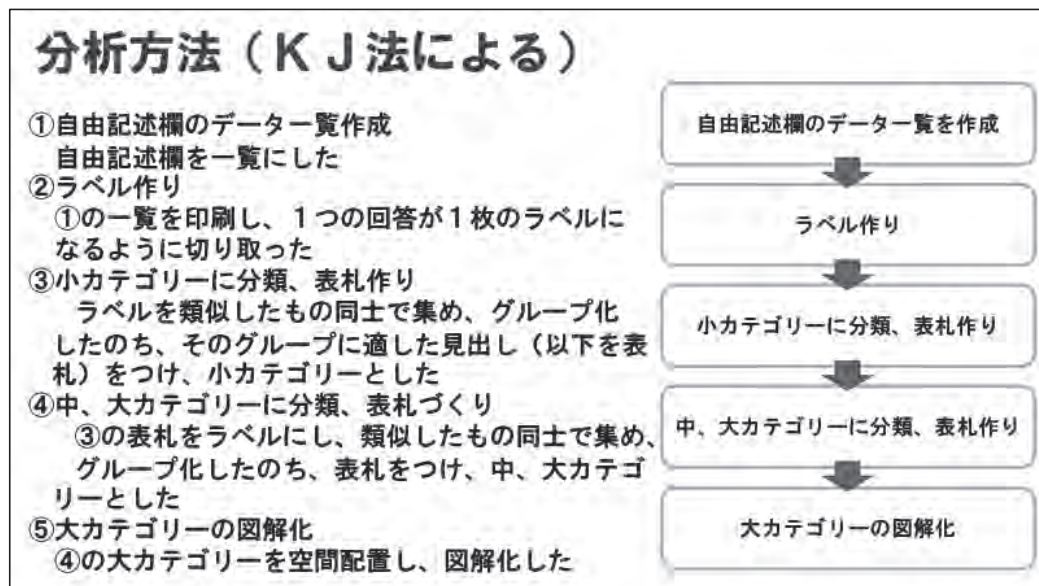


図2 分析方法

2) 分析方法

分析はK J法を用いて、自由回答の記述のカテゴリー化を行った。分類に関しては、調査者に加えて協力者3人を含む4人によって行った。

3. 結果及び考察

1) ① 子どもの食を支えるために父親に必要な力

回答は、のべ148件得られ、10の大カテゴリーに分類された。回答が最も多かったカテゴリーは、食べる側面の「子どもと一緒に食事をしてほしい」という項目の「子どもと一緒に食事すること（34件）」であり、次いで、「おいしいと食べる姿を子どもに見せてほしい」な

どを含む「食事場面において子どものお手本になる力（23件）」であった。作る側面においても「食事づくりができる力（21件）」や、「収穫栽培活動をしてほしい」等の「自然の中で子どもと食を楽しむ（12件）」も見られた。

一方、食行動の準備要因として、「食の知識・理解（16件）」「子どもの食の知識・理解（15件）」と、予想以上に「子どもの食の知識・理解（15件）」を求めている。

このように、父親に必要な力として、「作る場面」以上に、「子どもの食の知識・理解」をもとに、食べる場で、食事を「おいしく」と食べ、楽しむ姿の見本になることに期待が寄せられた。

表23 子どもの食を支えるために父親に必要な力

大カテゴリー	中カテゴリー(該当する回答数)	小カテゴリー	回答数	アンケートの回答例
食 べ る	子どもの食環境を整える力(7)	子どものお腹が空く生活リズムを作ってほしい	4	・子どもの生活リズムを整え、子ども中心の生活を送るための努力
		お腹を空かせるために子どもと体を使って遊んでほしい	3	・お腹がすくまで一緒に遊ぶ
		子どもにとって適切な食の環境づくりをしてほしい	0	—
	子どもと一緒に食事すること(34)	子どもと一緒に食事をしてほしい	34	・家庭で一緒にご飯を食べる ・家族団らんで食事をすること
	子どもとコミュニケーションをとること(6)	子どもとコミュニケーションをとってほしい	6	・子どもとの会話 ・父親と子どものコミュニケーション能力
	しつけやマナーを教える力(7)	食事のマナーを教えてほしい	4	・食事のマナー
		食事のしつけをしてほしい	3	・食事のしつけ
	子どものお手本になる力(23)	「おいしい」と食べる姿を子どもに見せてほしい	6	・おいしそうに食べている姿
		好き嫌いを残さずに食べてほしい	6	・子どもと一緒に好き嫌いをなくす努力をしてくれる父親
		もりもり食べる姿を子どもに見せてほしい	4	・もりもり食べている姿
		食事を楽しんでほしい	3	・楽しく食べる
		正しい箸の持ち方をしてほしい	2	・正しい箸の持ち方ができる
		食事のマナーの手本となしてほしい	2	・食事のマナーの手本となる
作 る	自然の中で子どもと食を楽しむ力(12)	収穫栽培活動をしてほしい	5	・植物や野菜などのお世話をする
		魚釣り、潮干狩りをしてほしい	4	・魚釣りや潮干狩りをして遊ぶ
		BBQ・アウトドアをしてほしい	3	・家族でBBQなどをする
	食事作りができる力(21)	食事作りをしてほしい	15	・簡単なものでいいから作れるようになること
		食事の片づけ、皿洗いをしてほしい	3	・食べた食器を片し、洗う
		買い物をしてほしい	3	・買い物に行くこと
		素材を生かした食事作りをしてほしい	0	—
		色々な食材を使った食事作りをしてほしい	0	—
		好き嫌いがなくなるような食事作りをしてほしい	0	—
		栄養バランスのとれた食事作りをしてほしい	0	—
		子どもの状況に応じた食事作りをしてほしい	0	—
	子どもと一緒に食事作りができる力(4)	子どもと一緒に買い物、食事作りをしてほしい	4	・子どもと一緒に食事を作ったり、買い物に行って食材の事を話したりする
知 識 ・ 理 解	食への知識・理解(16)	朝食の大切さを知ってほしい	3	・朝食の意味や大切さ
		食事や食べ物に関心を持ってほしい	3	・食事に関心をもつ
		行事や季節の食べ物を大事にしてほしい	5	・行事を重んじ、行事の儀式を行う(行事食を含む)実行力
		共食の大切さを知ってほしい	5	・一緒に食事をする事の大切さを知る
		献立や調理、味つけについて知ってほしい	0	—
		食事の大切さを知ってほしい	0	—
		栄養について知ってほしい	0	—
		離乳食について知ってほしい	0	—
		アレルギーについて知ってほしい	0	—
		体調の悪いときの食事について知ってほしい	0	—
	子どもの食への知識・理解(15)	子どもの食事内容や食事の様子を知ってほしい	5	・子どもの食べる量や食事にかかる時間を理解してもらいたい
		子どもの嗜好を知ってほしい	3	・子どもの好き嫌いなど関心を持ってもらえるとよい
		子どもの様子を知ってほしい	3	・子どもの日常を知る
		子どもの発達について理解してほしい	2	・自分の子どものこと(発達)を自分で理解しようとする
		子どもの食に関心をもってほしい	2	・子どもの食に関心を持つ
その他			10	・父親(男性)にしかない感性で子どもと接する ・「ありがとう」を言う

計 148

1)ー② 子どもの食を支えるために母親に必要な力

のべ155件の回答が得られ、1)ー①と同様の10の大きなカテゴリに分類された。回答が最も多かったカテゴリは“栄養バランスの取れた食事作りをしてほしい”などの項目を含む「食事作りができる力(42件)」、「子どもと一緒に食事づくりができる力(24件)」であり、作る側面に重点が置かれていた。また、“朝食の大切さを知ってほしい”などの項目を含む「食への知識・理解(38件)」にも重点が置かれていた。父親のように、食

べる場や栽培収穫活動には重点が置いていないことが明らかになった。

一方、食行動の準備要因として、「食の知識・理解(38件)」「子どもの食の知識・理解(4件)」と、子どものことと断定しないで「食の知識・理解」を求めている。

このように、母親に必要な力として、幅広い食の知識と、それを具現化する食事づくりができる力、それとも子どもと一緒に食事づくりを楽しむ力を向上させることに期待が寄せられた。

表24 子どもの食を支えるために母親に必要な力

大カテゴリ	中カテゴリ(該当する回答数)	小カテゴリ	回答数	アンケートの回答例	
食 べ る	子どもの食環境を整える力(6)	子どもにとって適切な食の環境づくりをしてほしい	4	・子どもが安心してゆったりと食べられる環境づくり	
		お腹を空かせるために子どもと体を使って遊んでほしい	1	・食欲から他の活動の意欲へとつなげること	
		子どものお腹が空く生活リズムを作ってほしい	1	・お腹の空くリズムについて(早寝、早起きなどを含む)	
	子どもと一緒に食事をする(13)	子どもと一緒に食事をしてほしい	13	・家庭で一緒にご飯を食べる・一緒に食卓を囲む	
	子どもとコミュニケーションをとること(6)	子どもとコミュニケーションをとってほしい	6	・会話を大切にする・コミュニケーションをとる	
	しつけやマナーを教える力(8)	食事のマナーを教えてほしい	5	・食事のマナー	
		食事のしつけをしてほしい	3	・食事のしつけ	
	子どものお手本になる力(11)	好き嫌いせず残さずに食べてほしい	5	・好き嫌いをしないでいろいろなものを食べてほしい	
		「おいしい」と食べる姿を子どもに見せてほしい	3	・「おいしい」と感じたときに大きくリアクションする	
		食事のマナーの手本となってほしい	2	・食事のマナーの手本となる	
		正しい箸の持ち方をしてほしい	1	・箸の持ち方	
		食事を楽しんでほしい	0	—	
		もりもり食べる姿を子どもに見せてほしい	0	—	
自然の中で子どもと食を楽しむ力(1)	収穫栽培活動をしてほしい	1	・家庭菜園をする		
	BBQ・アウトドアをしてほしい	0	—		
	魚釣り、潮干狩りをしてほしい	0	—		
作 る	食事作りができる力(42)	食事作りをしてほしい	11	・少しでも手作りの食事を出す	
		栄養バランスのとれた食事作りをしてほしい	11	・バランスのとれた食事作り	
		色々な食材を使った食事作りをしてほしい	6	・いろんな食材を使った料理を作ってもらいたい	
		好き嫌いがなくなるような食事作りをしてほしい	6	・好き嫌いがなくなるような料理の提供	
		子どもの状況に応じた食事作りをしてほしい	5	・年齢において適正な食事が作れるようになる力	
		素材を生かした食事作りをしてほしい	3	・旬な素材を生かした調理、素材の味がわかる薄味の味付け	
		買い物をしてほしい	0	—	
		食事の片づけ、皿洗いをしてほしい	0	—	
		子どもと一緒に食事作りができる力(24)	子どもと一緒に買い物、食事作りをしてほしい	24	・家庭で一緒に食事の支度をしたり、買い物に行って食材を選んだり
	知 識 ・ 理 解	食への知識・理解(38)	朝食の大切さを知ってほしい	9	・朝食を大事にすること
食事の大切さを知ってほしい			7	・今の時期食事をきちんととらないとどうなるか	
行事や季節の食べ物的大事にしてほしい			5	・行事や季節の食べ物を大事にする	
献立や調理、味付けについて知ってほしい			5	・調理、味付け方法を知る	
栄養について知ってほしい			5	・栄養のバランスを知る力	
食事や食べ物に関心を持ってほしい			3	・食材、食べ物などの知識	
離乳食について知ってほしい			2	・離乳食についての知識(作り方、進め方)	
アレルギーについて知ってほしい			1	・アレルギーについての知識	
体調の悪いときの食事について知ってほしい			1	・体調の悪い時の食事	
共食の大切さを知ってほしい			0	—	
子どもの食への知識・理解(4)		子どもの食に関心をもってほしい	4	・自分の子の食べる量を知る	
		子どもの嗜好を知ってほしい	0	—	
		子どもの食事内容や食事の様子を知ってほしい	0	—	
		子どもの発達について理解してほしい	0	—	
		子どもの様子を知ってほしい	0	—	
その他			8	・生きる力や知恵・無理強いしない・子どもを家族一員と考えること	

計 155

2)―① 保育所での父親への支援

のべ146件の回答が得られ、3つの大カテゴリーに分類された。回答が最も多かったカテゴリーは、“保育参加・参観”“親子で参加する行事への参加”などの項目を含む「学ぶ・ふれあう場の提供（70件）」を重視していた。父親のみが参加する企画から、親子で参加する企画、また、父親同士の話し合いの場を作ることも重視していた。

母親に比べ、父親には親子で参加する行事（調理体験や栽培収穫体験等）の参加への意向が強かった。父親に

も“通常の保育（食事の場を含む）参加を通して、子どもの食事の様子を知ってもらう”“子どもと一緒に体を動かして、おなかがすく気持ちを共有してもらう”等、積極的に保育の意図を伝え、その背景にある子ども理解を深める機会を提供したいと考えていることが明らかになった。同時に、「送迎時の声かけ（12件）」などの相談や援助が父親に対する支援としても重視されていた。送迎に父親が関わっていることが多いケースもみられ、貴重な情報交換の場として重視していることが明らかになった。

表25 保育所での父親への支援

大カテゴリー (回答数の計)	小カテゴリー	回答数	アンケートの回答例	
(27)	情報 の 提 供	園だよりの発行	12	・食育だより等で、父親の食事作り、望まれることなどを伝えていく ・園だより等でこちらの活動を発信していく
	掲示板での掲示	8	・正しい食事、食習慣はどのようなものか、なぜ必要なのか掲示で伝える ・食事の様子を知らせる写真など	
	献立・メニュー・レシピの配布	5	・お父さんでも作れる簡単レシピの紹介 ・給食の紹介、レシピ、作り方の紹介	
	給食の展示	2	・園においてある給食を見てもらい子どもと会話してもらう	
(19)	相 談 や 援 助	送迎時の声掛け	12	・食を話題にして話しかけることもいいと思う ・送迎時でも直接話せる機会を増やし、子どもの様子を伝える
	保育士からの助言・提案	4	・なかなか子どもと一緒に食事を食べることも少ないので一日一回は一緒に食事をとアドバイス ・過程で食事をとる提案	
	連絡帳への記載	2	・連絡帳で子どもの姿を伝える	
	質問箱の設置・アンケート調査	1	・父親自身の気持ちをアンケート形式でもいいので読み取る	
	栄養士からの助言・提案	0	－	
	保護者の相談にのる	0	－	
(70)	子 へ	子どもの食育活動の企画・運営	0	－
	保 護 者 へ	保育参加・参観の企画・運営	26	・保育参加等で子どもと食事をする楽しさや大切さを伝えていく ・父親にも保育参加(参観)してもらい、子どもの食事の様子を知ってもらったり、保育のあり方を知ってもらう ・保育参加を通して子どもと楽しく体を動かしお腹がすくという気持ちを共有してもらう
		体験型学習会の企画・運営	6	・父親でも作ることができる簡単な料理、おやつを提案し、子どもと一緒に食に関わる機会を作る ・父親だけが集まって、父親クッキングを行ったりする
		試食会の企画・運営	6	・お父さんが参加しやすいように土曜日などを使って試食会を行う
		保護者同士の話し合いの場の提供	3	・一緒に食事をとることの大切さを懇談などでも伝えていく
		学習会の企画・運営	0	－
	親 子 へ	親子で参加する行事の企画・運営	21	・保育参加などに参加し、収穫体験をする ・父親も園に行って参加できるようなイベントを考える ・父親も参加しての親子クッキングを行い、作って食べることの大切さや子どもと過ごすことの楽しさを伝える
		親子クッキング教室の企画・運営	8	・親子クッキングなどを通じて、子どもと食事を作る楽しさを共有し、自宅でも実践してみようという考えに至るように促していく
	伝える(手段不明)		16	どう伝えるか手段は不明ですが、子育て・食知識、子どもの様子について伝えるという意見がありました
	その他		14	－

計 146

2)―② 保育所での母親への支援

のべ166件の回答が得られ、2)―①と同様の3つの大カテゴリーに分類された。回答が最も多かったカテゴリーは、“保育参加・参観の企画・運営”“試食会の企画・運営”などの項目を含む「場の提供（48件）」であった。次いで、「情報の提供（38件）」「相談や援助（31件）」の順であった。

「情報の提供」では、園だよりと共に、献立・メニュー・レシピの配布、給食の展示など、給食とつながる支援が抽出された。父親に比べ、「相談や援助」が重視さ

れており、保育士だけでなく、“栄養士からの助言・提案”も見られ、栄養面や食事づくりからのサポートを重視していた。また、“各年齢の食事の目安量や気を付ける点等の勉強会”“だし汁、減塩、調理方法などを学ぶ機会をつくる”等の学習会の実施という母親への特徴的な支援があげられた。さらに、「どのように伝えるか手段は不明だが、園の活動、子育て・食知識、子どもの様子、園の給食について伝える」が32件みられ、具体的な手段までは提案されないまでも、その重要性を認知していることが明らかになった。

表26 保育所での母親への支援

大カテゴリー (回答数の)	小カテゴリー	回答数	アンケートの回答例
(38)	園だよりの発行	13	・旬な食材のおいしい時期などを給食だよりで知らせる ・食の重要性についてお便りなどで伝えていく
	献立・メニュー・レシピの配布	13	・給食のメニューのレシピの作り方を配布する ・離乳食メニューの紹介(作り方、進め方についてお知らせ)
	掲示板での掲示	8	・保育所の掲示板等に給食や食育の情報を貼る ・クッキングのときの様子などを写真でクラスに貼りだし、知ってもらう
	給食の展示	4	・保育所の給食の見本を見ていただく
(31)	送迎時の声掛け	9	・家庭での食の状況と園での様子を共有し合う ・子育ての頑張り認め、褒めていく
	保育士からの助言・提案	9	・無理に全部を食べなくても、違うアプローチの方法があることを教える ・家族で食事をとる提案
	栄養士からの助言・提案	7	・だしの取り方を栄養士から学ぶ ・調理方法、食事の工夫(環境)の提案
	保護者の相談にのる	4	・給食の様子を見てもらい、相談にのる ・相談を受け、一緒に考える
	連絡帳への記載	1	・連絡帳で生活リズムについて伝えていく
	質問箱の設置・アンケート調査	1	・給食部専門の質問箱を設置、もしくは担任に渡していただき、献立の説明や調理方法についてお答えする
(48)	子へ 子どもの食育活動の企画・運営	2	・栽培、収穫をする
	保育参加・参観の企画・運営	13	・保育参加を通して園での子どもの様子を知る機会を持つ ・保育した意見を通して、保育士が子どもたちにどのように育て欲しいかを実感していただく
	試食会の企画・運営	11	・園で食べている給食を食べてもらう ・離乳食使用旬会・幼児食試食会(進め方・味付け・量・食べる機能の発達・食具などを伝える)
	学習会の企画・運営	6	・各年齢においての目安量や気を付ける点などの勉強会 ・だし汁、減塩、調理方法などを学べる機会をつくる
	体験型学習会の企画・運営	3	・保護者、母参加での食育を行う ・調理の実施
	保護者同士の話し合いの場の提供	3	・懇談会 ・保護者同士の話し合いの場を作る
	親子へ 親子クッキング教室の企画・運営	9	・親子クッキングなどの行事に参加してもらう ・親子クッキングを開催し、一緒に作る食事の楽しさやお手伝いなどにつなげてもらう
	親子で参加する行事の企画・運営	1	・子どもと一緒に食べ物について話をする時間や場所の提供
伝える(手段不明)		32	どう伝えるか手段は不明ですが、園の活動、子育て・食知識、子どもの様子、園の給食について伝えるという意見がありました
その他		17	-

計 166

以上のように、専門職は、父親に対しては子供と接する機会を増やし、食事場面において子どものお手本になること、母親に対しては、食への知識・理解を深め、食事作りを含めた実践が必要だと考えていることが明らかになった。そのための支援としては、父へは保育参加や食育活動への参加など、食を通した親子の交流の場の提供が重視され、母へは給食試食会やレシピの配布など、家庭での食事作りに繋がるような支援が重要視されている。

ることが分かった。

本調査で明らかとなった支援内容は、保育者が望ましい食の知識やスキルを発信する支援であり、保護者からの主観的ニーズ、想いや実際にされている工夫を引き出すこと、また、それを食育に反映させるような“双方向の支援”はあまりみられなかった。そのため、食を通した保護者の支援のためのアセスメント票の開発が望まれる。

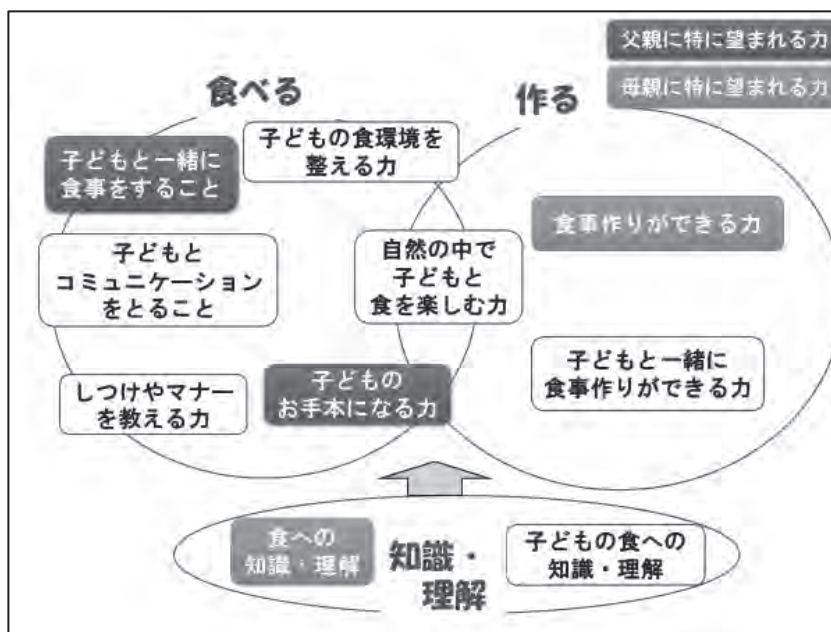


図3 保護者が子どもの食に関して身につけることが望まれる力

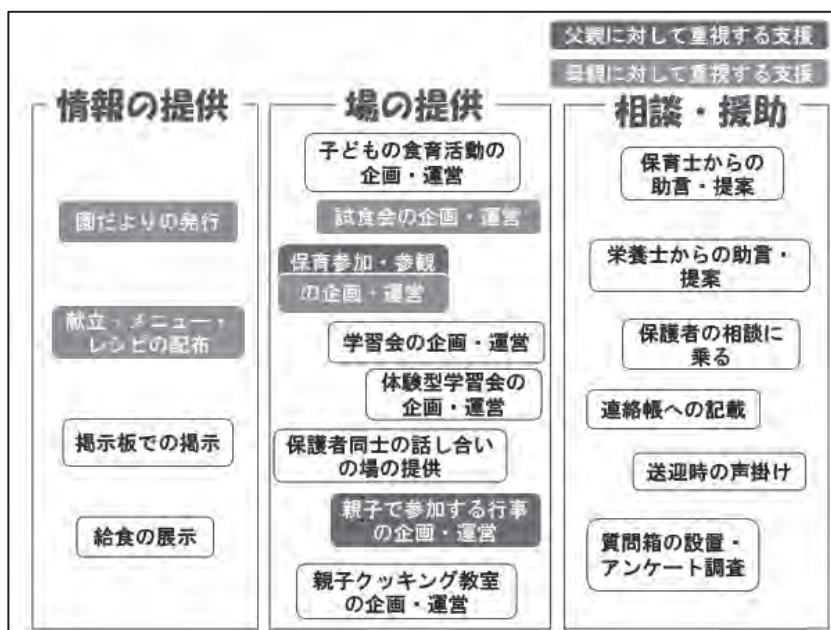


図4 食を通した保護者への支援

IV. 保護者が主体性となった食育活動に対する保育者の支援方法～保育者のグループインタビュー～

1. 目的

本研究の目的は、「父親」に焦点を当てたプログラムの開発に向けて、保育所の父親・母親の特性を生かした「子どもの食を支える力」測定の質問紙票の開発を進め、評価指標の提案するための基礎資料として、保育所で、親を対象とした食育活動をどのような手順で進めているかを明らかにすることである。

2. 方法

1) 対象

東京都A園に勤務する保育士7人を対象とした。調査園は園児の食育活動を積極的に実施するとともに、長年にわたり保護者主体の「おやじの会」などを継続しており、その背景を分析するために調査対象園として選定した。保育士の内訳は以下の通りである。

- ①A：幼児クラス担当・主任。経験年数20年（保育所）。
- ②B：幼児異年齢クラス担当・担任。経験年数5年（保育所）。
- ③C：2歳児クラス担当。経験年数2年（保育所）。
- ④D：0歳児クラス担当。経験年数不明（3か所の保育所を経験）。
- ⑤E：幼児クラス担当。経験年数4年（保育所）。
- ⑥F：1歳児クラス担当・担任。経験年数5年（保育所9）。
- ⑦G：幼児クラス担当。経験年数15年（保育所12年、幼稚園3年）。

2) 調査方法

平成28年10月、東京都A園にて、1時間半程度のグループインタビューを実施した。インタビューの前に、研究倫理について説明し、同意書に署名を得た。インタビューの内容は、①保育所では、子どもの「食を営む力」を育むために、保護者（父親、母親それぞれ）にどのような力があつたらよいと考えているのか、②子どもの「食を営む力」を育むために、保育所としてどのようにサポートしたらよいと考えているのか、③子どもの「食を営む力」を育むために、保育所から保護者に向けての活動があるのか。また、その中で保護者のどのような力が育っている（育ってほしい）と考えているのかである。インタビュー後は、謝礼を渡した。インタビューの進行は研究者1人が行い、記録はICレコーダー、定点カメラ、観察者2人で実施した。

3) 分析方法

インタビュー後は、ICレコーダー、定点カメラから逐語録を作成し、保育所で、保護者を対象とした食育活動をどのような手順で進めているかを明らかにするヒアリング調査を実施した。

3. 結果及び考察

1) 子どもの「食を営む力」を育むために、保護者（父親、母親それぞれ）にどのような力があつたらよいと考えているのか

母親では、保育所からの発信を受け止めるだけでなく、母親を通して家庭での子どもの様子（排便、食事、睡眠以外）を発信する力が必要であった。

父親では、「日常の中で今、子どもがどのような食品を食べているのかわかる」、「父親自身の箸の持ち方や食べる姿勢」など子どもの様子や食事中のスキルに関わる力が必要であると考えていることが抽出できた。一方、父親が母親と同じように調理をすることなどを望むという意見はあまり見られなかった。日常的に保護者、特に父親が、子どもの食事作りに関わる事の困難さ（仕事などの時間的な制約や、家庭内での役割分担）を感じていることや、イベント的な楽しみとしての位置づけで良いと考えていることも抽出できた。保育士から見た、上記のような父親の姿、食育に対する意識や考えの分析から、父親を対象とした食育プログラムの意義や可能性が感じられた。父親を対象とした食育プログラムを試案するときには、調理のスキル向上に力点を置くのではなく、子どもの食に関する気づきの視点が保育士と共に活動する中で培われ、日常の中で自然に子どもの食に関することが話題にできる力が育まれていくことが望まれる。また、一般的に父親の場合、共に遊ぶといったイメージから、おやじの会などは幼児との遊びを中心とした関わりが多く見られるが、今回の調査でも、3、4、5歳児の保護者は、食以外の事に話題が移っていく傾向があるという保育士からの発言が見られた。

同時に、保護者が保育士に対して、食に関することを話題にするなどの発信内容が多い年齢として、摂食形態が変化する0～2歳児であることが今回の調査から抽出できた。そのため、父親を対象とした食育プログラムを試案する時には、乳幼児、特に0～2歳児を持つ保護者を対象に作成することが有効であることも考えられた。保護者が保育所から教えてもらう、情報をもらうだけでなく、考えて自ら行動する、つまり、養育力を高めていくスキルが重要だと認識していることも明らかになった。

2) 子どもの「食を営む力」を育むために、保育所としてどのようにサポートしたらよいと考えているのか

保護者のアイディアなどを快く受け止められる力と同時に、保護者と同じように活動に参加することが必要であると考え、実践していることが分かった。しかし、そのアイディアを受け止めたり、一緒に行動することは保護者の行動しやすい週末などの休日であったり、保育士の業務時間内では収まっていない様子であった。その体制作りは今後の課題だと考えられる。

3) 子どもの「食を営む力」を育むために、保育所から保護者に向けての活動があるのか、また、その中で保

護者のどのような力が育っている(育ってほしい)と考えているのか

「おやじバンド」「蕎麦打ち」「水餃子作り」などの「おやじの会」、保育参観、給食試食会などの他に、園庭の整備や遊具作りなど突発的な活動も多く存在していた。保育士の受容する態度「受け止める力」と、保育士も一緒に参加することが、保護者が主体的に食に関わる力を育んでいると感じていることが抽出できた。

以上、保育所での保護者を対象とした食育活動を、保護者の主体性を保ちながら展開していくためには、父親自身の子どもの食への気づきの視点や望ましい食態度を向上していくスキルなどが必要であることが明らかとな

った。保育所に通園している間に、またその後も、保護者自身がいろいろな人と関わり、様々な情報の中から必要なものを取捨選択できる力を身につけ、責任を持って子育てしていく力、保護者自身の養育する力を育んでいくようにサポートしていくためには、保護者自身が悩み、考えていくことが必要であることが示唆された。また、それらを支える保育士のスキルとして、保護者を「受容し、共感し、共に行動する力」が求められることが示唆され、こういった中で保護者自身の養育力が向上していくことを感じていたが、保育士の日常的な労働環境の中にどのように組み入れていくかも、また一つの課題である。

表27 保育士のインタビュー内容

* (保) : インタビューを受けている保育士 (研) : インタビューしている研究者
一部抜粋したものを掲載

(保A) お父さんと食べる場面の話には、ほとんどならない。

まれに、お父さんがご飯作ってくる方が多いご家庭がたまにクラスに今一人くらいいるんですけど、ほとんどお母さんの方です。

(保G) なんか昔、行事のお弁当は必ずお父さんが作るっていうお家もありましたけど、なんかたまにお父さんと食べた、っていう日にはノートに「お父さんと一緒に食べました」っていうことが書いてある家庭とかあったりします。

(研) それは珍しいという事？

(保G) ラッキーな日という事。日常ではなく、珍しい。

(保D) 私0歳なんですけど、先日ちょうど懇談会があって、ご飯のお話になって、朝食はいつもパパが食べさせてくれていますっていう話が出て、2、3家庭くらいそういうお話が出て、ええーってみんなでびっくり。

(研) やっぱりびっくりするんですね。なんか今こうお父さんも育休をとったりとかイクメンという言葉も出てくるようになりましたけど、お父さんはどの辺を担っているのかなって思ったり・・・例えば休日にお父さんが男の料理を発揮するっていう所ではない、冷蔵庫の中身を見て、スーパーで特売を見て、今日の献立を考える食材を使いまわしていくことって、難しいのでしょうかね？

(保G) そんなお父さんには会ったことがない。役割分担っていうところだと、お父さんが遊んでいる間に、お母さんが家のことをするっているのが、私の話を聞く中では多いかな。あとやっぱり、幼児クラス3、4、5歳なので、話題が食に行かない世帯が増えてきたっていうのもあるかなって。こことか多分他園に比べたら食に関わる行事とか活動とか、子どもが普段目にしているものも多い気もするんですけど。やっぱり食って生活の一部なので、なかなかそこが今日のトピックみたいにはなりにくい。

園でのことは伝わってるんですね。例えばおにぎりの会があった、昨日のおにぎり、今日はどの世帯も大体ノートにそのことを書いてきていて、子どもがやったことに関してはすごくキャッチしてくれるんですけど、逆のパターン、お母さん発信でのお母さんから発信している子供を通しての家での様子ってなかなか伝わってこなくて、どっちかっていうと生活リズムとか、寝る時間とか、そういう事の方が私のクラスは多いなって。

(保C) お迎えの中で、お父さんのお迎えの日はラーメンっていう子とか、お父さんが餃子なら作れるから今日は餃子の日とか、お父さんメニューとかお父さんから外食があるとか、それもちぎった特別感になってくるとは思うんですけど、あとはお父さんがどれだけ家事できるかにもよってきちゃうのかなとは思いますが、それにお父さんにしても楽しんだり、今日はお父さんと一緒にラーメンデートって楽しみながら帰って行ったりっていう子がいたりするなっていう姿はあったりします。

(研) じゃあ子どもにとってはお父さんの特別感、お父さんの男の料理とか、外食とか、一品料理みたいなのは、楽しみの要素もある…？

(保C) あると思います。お父さんはやっぱりイベントなんですよ。くら寿司の日とか。

(研) じゃあちょっと視点を変えて、先生方がこういうお父さんだったらいいなって思うお父さんってどんなお

父さんですか？

(保D) いっぱいあるけど……保育士として？

食事のことだと、乳児の時期だとよくこれお家で食べられますか？って確認するんですけど、その時にあつお父さん迎えだからなって、聞けなかったりとか、やっぱりお母さんに確認しないと分かんないなって所があったりするんで、そこはちょっと同じようにわかってもらえたらいいのになって思ったりします。ちょっと分かんないって言われたりするんで。

(研) こういう事を把握しているお父さんって全くいないんでしょうか？

(保D) でもいまのクラスで、ちょっとお母さんに聞いてくださってと言われるお家もあれば、あつ食べてたと思いますみたいなお家もあるんで、やっぱり家庭によるんだなっていうのは感じました。

(研) ここの園って、父親って親父の会みたいなのがずっと有名でありますけど……。でもあんなふうに長く歴史があつてお父さんがずっと継続して、蕎麦の打ち方教えたりする所ってなかなかないと思いますけど、お父さんどうしのつながりって先生達はどんな風にサポートするんですか？

(保A) 自由ですかね……。

(他保育士) 一同、目を合わせてうなづく

(研) 例えば歴代いる親父の会の人と新しく来る人って繋がりがないわけですよね、どうやってサポートするんでしょう？

(保A) でもお父さん達が自分で声かけたり、募集中ですみたいな、私たちは親父じゃないから……。でもそこはお父さん方があまり無理をしない、っていう頑張らない親父の会をやっているんで、何か本当にゆるい感じで活動がすごく盛んになる時もあれば、いつやってるんだろうっていう時もあるって、そういうのもあり。コンスタントに活動しようじゃなくて、イベントが好きなお父さんがいる時は割と集まることが多いとか、バーベキューが多いとか、そういうのはそんなにだったり、音楽活動やってみたい人がいると、音楽の練習は一生懸命やるけどそんなにバーベキューか日々のイベントはそんなにないみたいな。

(研) じゃあ先生達はそんなに関わらない感じですか？場所の提供？

(保A) そうですね、いつでも集まれる場所が。でもいつでも集まれる場所ってそんなにないですからね。しかも無料で、音とかと気になくてよくて。

(研) 活動としてはどんなものがあるんですか？

(保D) バンドはちょっとだけやっていて、先生も入っている、ポジションはピアノです。本当に子供たちを楽しませたいっていうのもありきの、でもお父さん達が本当に楽しんでいるような、バンドも子供たちこれやったら喜ぶだろうなっていうのも選んでもらいながらも自分たちもやりたい懐メロ入れたりとか、練習の時も子供たち何人か連れてきたりとか、そういう時はお母さんはお家でお掃除とかしてて連れてきましたみたいな、お父さん達はじゃんじゃんやっていて、子供たちは勝手に遊んでいたりとか自分の出番じゃない時は見てくれている、私たちは保育士というよりは親父バンドの中の一人として、子供たちと保育するってことは全くないので。

(研) それは本当に伺ってみたかったことで、親父の会の時に、お父さんだけ楽しみに来るのか、お子さんも一緒に来て、そうするとお母さんは開放される時間にもなるのでお子さんどうなってるのかなって思ってたんですけど、殆どが連れてこられる訳ではない？そこから親父の会は他にどんな行事があるんですか？

(保A) でも大体連れてきている様子ですね。

年末の水餃子とか、行事ごとに食べるものを出してくれる。夏祭りは今年が蕎麦、冬が水餃子、年越しのそば打ちを親父の会で行って、来たい人って感じ。今年はツリーハウスの解体があつたり水路のメンテナンスをしてくれたりとか、必要に応じてベンチを作ってくれたりとか、そういうのもタイミングによってあります。

こういうのは園から水路のメンテナンスできる方いらっしゃいますかととか、ツリーハウスの解体をしたいんですけど、いかがですかみたいな事を？

水路は作った当初の方が今も水路メンテナンスやりますって方が道具持って手伝いに来てくださったりとか、在園のお父さんも、ツリーハウスの方は今年は大工さんが……。前から完成途中であつたんですよね、サグラダファミリアみたいな。いつ完成するの？ってお父さんたちは気にかけてくれて、気にかけてる内に、腐っちゃって、ダメだこれはなつて、じゃあ新しいもの作ろうねと、解体を手伝ってくれたんです。お父さん達が気にかけてくれてやってくれた感じです。

あとは園庭にこれがあったらいいよねみたいな、水路に関しては、前前任の園長が男性だったのでこんなあったらいいなって言ったらやろうよって集まってきてくださったたり。

- (研) 他の園では難しいだろうなって思いますね。保護者が園庭にあるものに介入できるとまず思っていない気もするし、実際に力を発揮していいんだっていう風には思ってたしやらない気もするので、雰囲気作りはどうやったら出来るんだろうって。子どもがお父さん達が力を合わせてツリーハウス解体してるのを見たら、働いてる姿を見ることが出来ますし、そういうのが自然にあっていいなって思うんですけど、どうやったらそれが出来るんでしょうね？

- (保A) 園長が自分が親父の会に入って、自分が率先して同じことをお父さん達とやって、園の先生が親と一緒に何かやるっていう時間も大事なんだろうね。なんか私は結構今の園長を見てて、すごく何でもふわっと受け止めるというか、聞き上手、聞くのがすごく上手だなと思っていて、自分もいろんな事を思っているのは間違いないけれど、まず他人がどう思っているかをすごく聞いてくださるから、多分お父さん達がしょっちゅう園長って言って話に行ってもそういうのもあるのかなって。あと、おれがやりたいっていうのはもちろんあると思うんですけど、自分がいる間に何とかしたいっていう思いは沢山あるんですけど、今度の日曜日にやりたいんだけどっていうのがあっても、そういうのを受け止められるところかなって。たぶんそれが前園長もそういう風に、「あ、日曜日無理」ではなくて、「あ、日曜日いいですよー」って感じでやれてるふんわり感なのかなと。

- (研) 大事ですよ。

- (保A) 言っても拒否されないだろうとか、相談して受け入れてもらえるだろうとか、そうすると言いやすくなりそうですよね、アイデアとか。これがあったらいいねとか前向きに考えていけるとところが大事なんだろうね。

- (研) 私、親父バンドに先生が入っているってところに実は驚いていて、なかなか親父の会に先生が入ってるってところも見ない、どっちかっていうと保育はこっちでしてるからお父さん達どうぞっていう所が、先生も1保育士ではなくて一緒になって親父の会のメンバーになれるって言うのも、だからこそ参加もしやすいんでしょうね・・・。

- (保G) お父さん方も本当に多分、園を一步出たら次って、振り返る余裕が保護者の方もないなって言うのが、園でその展示食の棚で、こんなの食べたんだねって言って、そこら辺までは園の余韻、今日1日の余韻を楽しんでらっしゃる方もいるな、なんですけど、でもお迎えきたら、はい、お兄ちゃんのお迎えしなきゃいけないから、晩御飯まだ何もしてないから、って言うとお母さんの気持ちは次、次って、もちろんそうなんですけど、そこに子供がどれだけ今日の出来事が言えているかっていうところで、やっぱり本当に余裕の無さなのかなと思ったり。でもなんか日常的には関われないようなものを園から発信していて、そこに参加しやすい、参加しようと思えば出来るチャンスがたくさんあるっていうのはいいですよ。そこでたまたま時間があるから参加してみようっていう人もいるかもしれないし、今みたいに狙って来ようって思う人もいる中で、選択肢があるっていうのはいいんでしょうし、そこを大事にしたいって思う気持ちがどうやったら芽生えるのかって、やっぱり保護者の経験ができる場面が多くないと難しいんでしょうかね。

- (保A) お父さんが肘をついて食べてるっていう、保育参観に来てても、お父さん行儀悪い。

- (研) なるほど。

- (保A) あと、去年箸を置いて前って、分かるんだけど、左手は皿に添えて、箸は持って美味しいって食べてほしいなっていう、あれは遊び食べだったよね。

- (研) お父さんの遊び食べ……。

- (保A) 大人の遊び食べだったよね、集中してなかったよね。食べることに。その状況を楽しんでしまっていたね。平気で残しますよね。食べれなかったらいいよ、集まれしないし、自分も残すし、ご飯粒びっちゃりついていても、え？みたいな。

- (保A) 見て私たちは残してるとか、汚いって思うけど、思う感覚もない。

綺麗に食べるの綺麗の概念がもうあまりに大きくなりすぎちゃって、園で、園の中でのマナーとか美味しく楽しくのところを大事にしても、そこを言っているのか、これを家庭に求めていいのか、食事の園の理想を家庭にどこまで受け入れてもらえるんだろうって、綺麗の概念が違うから、そうは言っても共感性が無ければ、努力もふーんで本当に終わることが、多い、多くはないのかな、その衝撃が大きいからなのかな、私たちの。結構箸の持ち方でも、結構すごい持ち方をしていたから、お父さんの送り迎えが続いて聞いたら、いや持ててますよって、お父さんは気になってないみたいで。でも見てたらすごい指上がつて

るしバッテンになってるし、今日から箸使ったんですけど、ちょっと持ち方がって言うともた問題が出てくるから、ちょっと持ちづらそうでお家でも使われてますか？って聞いたら、いや前から持ってます、全然食べれてますよって。あ、あーみたいな。違うんだっていう。

今お話聞いていて、お父さんお母さん自身が子供と向き合うためには、お父さんお母さん自身ももっとそれでいいんだよって思って子供と過ごしてもらえないと、多分なかなか向き合う、子供の育ちに真剣に、っていうのには行きにくいのかなっていうのをちょっと思いました。

今の傾向として、教えてもらいたい人が多い気がして、教えてもらった事をやりたい、やって失敗したらダメだったって相手に言いたい、でも保育所に来ているお父さんお母さんって育児の前半くらいじゃないですか。これからまだ長く続く子育ての中で、向き合わないといけないことはいっぱいあって、人から言われたことをそのままその通りにしてやっていける訳はないんですよね。保育所に来てたり、周りに助けて育ててくれる人がいる間に、その人自身がいろんな情報の中から選んで、そこに責任をもって子育てしていく力をつけないと、お父さんお母さん自身の養育力をもっともっと上げていかないと、難しいんだらうなって、それをどうしたらいいのかなって悩みつつあるんですが、教えてもらいたい人はどんどん増えて、考えることさえも相手に委ねたい。

いい方法ないですかね。ほうれん草食べないんですけど、何かいい方法ないですかね。みたいなね。専門家に丸々お願いして、聞いてやりたいっていう、そもそもそこが違うのかなって。

V. 全体討論

1. 子どものための親の「子どもの食を支える力」の形成

本研究では、研究1と研究2により、専門職が父親・母親双方に子どもの食を育むために、どのような力が必要であると捉えているかを検討し、三点が明らかになった。

第一に、食事の場で子どもとコミュニケーションをとること、しつけやマナーを教え、子どもの手本になることを、保護者自身が、また、専門職も母親以上に父親に求めていることが明らかになった。第二に、親自身、また、親子での食べ物の栽培・収穫（魚釣りなども含む）から買い物、調理に至る食事づくり力であり、母親ほどではないが、父親にも食事づくりができる力が必要だとされていた。第三に、一般的な食の知識・理解だけでなく、子どもの発達、嗜好などへの関心・理解の必要性が抽出された。

一般的には、「子どもの食を支える力」というと、やはり食事づくり力を中心にイメージする。しかし、食事づくりの中心になりにくい父親に焦点を当てることで、食事づくり以外に何をしたらいいのか、おいしく食べるモデルとしての役割に目を向けることを提案できた。食べる場の重要性である。子どもの食事援助をどのようにするか、また、そこでは、親も一緒に食事をしており、食べるモデルとなること、その背景には親の食事歴や食事観が反映され、継承されることである。保育所保育指針¹⁶⁾においても食事は「人とのかかわる力」を育む場とされてきているが、その実証研究、十分に科学的根拠を蓄積することができていない。集団保育の場では食事場面における子どもの対話のあり方の変化²¹⁾、また、それを支える保育士の働きかけの特質²²⁾について研究が始

まったばかりであり、家庭保育と比較も必要であろう。

一方、食事づくり力について、足立²³⁾は単なる調理技能に留まらず、「自分のライフスタイルや心身に合った食事を構想し整える力」と捉えている。女子大学生については、「食事づくり力」の形成要因に関するグループインタビュー²⁴⁾やその力の測定のための質問紙の開発²⁵⁾も進められてきている。調理の得意グループは、不得意グループに比べ、小学校から高校までの調理の体験に加え、父、祖母など母以外の家族からたくさんの観察学習の機会と、正の強化を得ており、食事づくり能力を形成する上でより支援的な家庭環境にあったことが報告されている²⁴⁾。父親・母親になって、食事づくり力がどのように変容するのか、その時に強化要因とは何かについても研究を進める必要がある。同時に、酒井は幼児の食事づくり力の生成のために何が必要か、0歳からの「快」の経験を積み重ねる「食べる」場の重要性と、集団保育の中での協働の学びの場としての「食事づくり」の重要性を指摘する²⁶⁾。大人が考える枠組みでない、子ども自身が繰りひろげる生活の中に真実があるであろうことから、乳幼児の食事づくり力の生成のプロセスとそのための環境構成（応答的な発達援助を含めて）を探ることで、親の食事づくり力の形成課程も解明されるであろう。

2. 保育所での父親・母親の特性を重視した支援方法

母親以上に父親への支援方法として「保育参加・参観」「給食の試食会」「親子での食べ物を育てて収穫する」「親子で調理体験をする」などの体験学習の機会、さらに、「保護者同士の話し合いの場の提供」であった。これらは昨年度の質問紙調査の結果³⁾とほぼ同様であり、こうした内容を盛り込んだプログラムにすることが期待されていることが明らかになっている。父親が「給食の

献立表を見る」こと等をあまりしていないという昨年度の結果³⁾から、試食会の内容も単なる試食だけではなく、保育参加により、食事場面での援助の方法、家庭で実践しやすい「母乳・離乳食・幼児食等に関する講座を受ける」、具体的な実践例を模索できる「親同士で子どもの食について話し合う」等を盛り込んだ活動、農家の方と親子と一緒に食物の栽培・収穫にかかわる活動などを望んでおり、食を通した人的ネットワークの拡大を目指すことが有効な手段である可能性も推察された。特に、父親の場合、専門職が親子での学習の場の提供が有効であると考えていることが明らかになった。父親の会など保護者主体の活動を実施している園ほど、「父親同士はもちろんのこと、地域の人々と食を通じて交流する」の重要性を訴えていた。逆に、給食の試食会や保育参加を通して保育内容の公開をすることで、保育への信頼がより高まる可能性も示唆された。島津²⁷⁾は、保育参加による保護者や保育者の学びや葛藤、認識の変容は、レイブとウエンガー²⁸⁾が提示した正統的周辺参加論に依拠すれば、協働の学びの契機であると同時に、保育を行う実践共同体自体の変容や保育の質の向上の可能性を有することを指摘する。

研究3の保護者が主体的に食に関する活動をしている保育園でのグループインタビューから、「保育所という場を提供するのではなく、一緒に保育士も参加する」という視点が提示された。まさに、島津が指摘するように、「保護者と共に保育を行う実践共同体」であることになるのであろう。食物の栽培・収穫のみならず、食事を子どもと一緒に食べることの意義と共に、それを保護者と子どもと保育者の三者での協働の学びの機会にしていくことの重要性を再確認することができた。

保育所の保護者を対象とした食を通した支援、特に、交流・学習の場を作ろうとしたとき、時間の設定が難しい。今回の保護者を対象としたグループインタビューも土曜・日曜日の休日に実施した。保育所の保護者のように共働き家庭の場合、休日は家族で過ごしたいと考えるのが一般的であろう。つまり、仕事の疲れをいやしたいのもあるが、たまの休みに子育ての学習をしたいとは思わないのではないだろうか。「イクメン」という響きに必ずしも共感できない男性たちも多いだろう。そうした男性に、参加してみたいというモチベーションを持たせるコンテンツが必要だといわれる²⁹⁾。「父親教室」は、孤立した親が他の親と知り合う場をつくる、いわゆる父親同士のネットワークキングの場としては機能しておらず、「子育て主体者」から「地域活動の主体者」への広がりは見られない。その背景には「父親教室」が母親と比較して1クールの回数が少ないためであるともいわれる³⁰⁾。保育所のように複数回の実施が可能な場合には、「食を通した活動」が父親のネットワークキングの引き金になる可能性も多いにあるであろう。ましてや、日常的に親が関わっている保育所だからこその効果が得られる

ことを期待したい。幼稚園の「おやじの会」に実際に参加した父親からは、子ども同士の活動を見ることによって、子どもの新たな面を発見できたという発言がなされている³¹⁾。どのような効果を、活動の成果とみなすのか、十分な検討が必要である。

現在では、父親だけでなく、母親自身も子育てや食に関する知識や体験が不足している。子どもたちを取り巻く問題に的確に対応していくためには、保育所をはじめとした多様な社会資源が教育力を総合的に向上させていくことが課題である。そのため、保育所が給食とそれを食べる場を継続的に提供しているという特徴を活かした活動を家庭にむけて展開し、家庭の中に還流させることにより、子ども自身の育ちを支えるだけでなく、同時に保護者が意欲を持って生き生きと子育てし続ける力、そして生き生きと生活していく力を育むことを目指したい。

本研究により、保護者から、また、専門職の双方からみた父親・母親の特性をもった「子どもの食を支える力」と、その支援方法が明らかになった。専門職は保護者が保育所から教えてもらい、情報をもらっただけでなく、考えて自ら行動する、つまり、養育力を高めていくスキルが重要だと認識していることも明らかになった。さらに、保護者の主体的な企画・運営を促すためには、保護者からの主観的ニーズ、想いや実際の工夫を引き出すことが重要であり、そのためのアセスメント方法の開発を今後していきたい。

文 献

- 1) 柏木恵子編著：父親の発達心理学、川島書店（1993）
- 2) ベネッセ教育総合研究所：第3回 乳幼児の父親についての調査（2014）
- 3) 酒井治子：食を通した子育て支援の観点を活かした保育所保育に関する研究 ～父親が発信者となる家庭での食育を焦点に～、保育科学研究 第6巻、22-53（2015）
- 4) 世田谷区保育親の会：世田谷区内認可保育園及び父母の会アンケート調査結果報告書、19（2011）
- 5) 及川裕子、宮田久枝、新道由記子、登日麻並：現代日本における男性と出産・育児、園田学園女子大学論文集、第46号、43-58（2012）
- 6) 株式会社マーシュ：男性の育児参加に関するアンケート、<http://www.marsh-research.co.jp/examine/ex2102.html>（2009）
- 7) 時事通信社：父親の育児参加に関する世論調査（2011）
- 8) 今村佳代子、瀬上綾、和田みゆき、迫田真貴子、瀬戸梢、原口美穂、松木田恵美、丸山千寿子：母親の食生活に対する行動変容の準備性と児童の朝食摂取および家族の健康関連行動との関連、日本公衆衛生誌、59（4）、277-287（2012）
- 9) 岡見雪子：幼稚園児の食生活慣習と母親の食育との関連、名古屋文理大学紀要、12、131-142（2012）
- 10) 富岡文枝：幼児への食教育と両親の食意識及び食行動と

- の関わり、栄養学雑誌、57 (1)、25-36 (1999)
- 11) 厚生労働省雇用均等児童家庭局母子保健課：平成27年度乳幼児栄養調査 (2016)
 - 12) 青野篤子：「男性の子育て」支援の現状と課題、福山大学こころの健康相談室紀要、3、9-14 (2009)
 - 13) 金山 美和子：男性の育児を促進する子育て支援の検討：上越市における実践事例を通して、上田女子短期大学紀要27、1-9 (2004)
 - 14) 金山美和子：男性の育児を促進する子育て支援の検討 (2)：地域子育て支援の利用状況調査から、上田女子短期大学紀要28、93-100 (2005)
 - 15) 鈴木 順子：父親の子育て支援に関する研究：地域子育て支援センターを利用する父親を対象として、金城学院大学論集、人文科学編、8 (1)、124-133 (2011)
 - 16) 厚生労働省：保育所保育指針 (2008)
 - 17) 中村恵美：子育てに対する父親の思いの変化 -フォーカス・グループ・インタビューによる父親の語りから-、小児保健研究75 (2)：254-260 (2016)
 - 18) 諏訪きぬ：子育て支援 (総説) (第1部〈特集論文〉子育て支援)、保育学研究52 (3)、314-318 (2014)
 - 19) 酒井治子：子育て支援のための地域における食育の取り組みの分析・評価に関する研究、こども未来財団 (2009)
 - 20) 安梅勅江：ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法～科学的根拠に基づく質的研究法の展開～、医歯薬出版株式会社、24-65 (2007)
 - 21) 淀川裕美：2-3歳児の保育集団での食事場面における対話のあり方の変化：伝え合う事例における応答性・話題の展開に着目して、保育学研究51 (1)、36-49 (2013)
 - 22) 伊藤 優：保育所の給食場面における保育士の働きかけの特質、保育学研究51 (2)、211-222 (2013)
 - 23) 足立己幸：食生活論、51-54 (1987)、医歯薬出版、東京
 - 24) 駒場千佳子、武見ゆかり、中西明美 [他]、松田康子、高橋敦子：女子大学生の調理をする力の形成要因に関するフォーカスグループインタビューを用いた検討、日本調理科学会誌45 (5)、359-367 (2012)
 - 25) 駒場千佳子、武見ゆかり、中西明美、松田康子、高橋敦子：女子大学生の「食事づくり力」測定のための質問紙の開発：一栄養学を専攻する女子大学生を対象とした検討一、栄養学雑誌72 (1)、21-32 (2014)
 - 26) 酒井治子：幼児の食事づくり力の生成～食を営む力の基礎を培う幼児教育の視点から～、食生態学―実践と研究―、9、30-31 (2016)
 - 27) 島津礼子：幼稚園の「保育参加」における学びの生成について、保育学研究 52(3)、344-354(2014)
 - 28) Jean Lave、Etienne Wenger：状況に埋め込まれた学習―正統的周辺参加 (佐伯胖 訳) 産業敏夫、28-31、(1993) (Jean Lave、Etienne Wenger (1991)、Situating Learning：Legitimate Peripheral Participation、Cambridge University Press)
 - 29) 斎藤嘉孝：父親・祖父母対象の公的プログラムのあり方についての検討―家庭教育支援事業における父親教室・祖父母教室―キャリアデザイン学部紀要10、93-108 (2013)
 - 30) 冬木春子：少子化対策における「父親支援策」―自治体による「父親教室」に着目して―、静岡大学教育学部研究報告、人文・社会科学篇57、91-105 (2007)
 - 31) 須田康之、宮元博章、堀端優也 [他]、小林禎明、長谷拓郎、大島秀子、青平：おやじの会という連携のかたち：兵庫教育大学三校園『おやじの会』の事例をもとに、兵庫教育大学研究紀要45、1-8、2014-09